1969

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十三年八月十日發行（毎月一回十日發行）

京城雜筆

永樂町人 編輯

八月號

【第六十六號】

サッポロビール

エビスビール

アサヒビール

京城雜筆八月號執筆者

（大體原稿到著順）

橘川克彦（京城郵便局長）……碁と囲……（二）
伊藤龍（朝鮮ホテル）……ホテル漫筆……（三）
伊藤憲郎（京城覆審法院判事）……おさなき日……（四）
武者錬三（京電會社專務）……夏の旅……（五）
野崎眞三（朝新社會部長）……新聞の嘘……（六）
高木背水（西洋畫家）……夏の夜の星……（七）
寺尾猛三郎（龍山寺尾組長）……珍紛漢語……（八）
篠田治策（李王職次官）……古名優の話……（九）
岩本善文（朝鮮鐵道協會）……新羅三姓一元論……（一〇）
安藤又三郎（滿鐵京城鐵道局長）……繪とゴルフ……（一一）
名村寅雄（大阪毎日京城支局長）……宿屋雜草……（一二）
別府西海（京城日日理事）……財界春秋……（一三）
守屋德夫（殖銀秘書課長）……古帽の記……（一四）
西崎鶴太郎（鎭南浦實業家）……臨江亭漫筆……（一六）
中村巖（京城信託株式會社）……會社辨を讀む……（一七）
石橋滿（朝明舍支配人）……お灸のこと……（一七）
今村靭（李王職庶務課長）……藥水のこと……（一八）
小野久太郎（朝鮮經濟日報社長）……私の通信經營……（一九）
名流十二家……好める景勝地……（二〇）
石森久彌（朝鮮公論社長）……水鄕の思ひ出……（二一）
瀧原久四郎（總督府遞信局長）……譯遞雜記……（二二）
佐藤作郎（滿鐵旅客係主任）……朝鮮六景……（二四）
河谷靜夫（京城日報社理事）……續十有六半……（二六）
鈴木兵作（京城本町署長）……働きの自然……（二六）
川井昌一（明治町玩具卸商）……玩具と朝鮮の子供……（二七）
工藤武城（京城婦人病院長）……硯……（二八）
中島司（殖銀調査役）……大漢門前に立ちて……（二九）
廣江澤次郎（實業家）……子供に恥づ……（三〇）
河西宵苔（京日政治部）……住めば都……（三一）
岸巖（朝鮮銀行發行課長）……水の味……（三二）
川本竹松（鎭南浦電氣支配人）……事務哲學……（三三）
有賀光豐（朝鮮殖産銀行頭取）……趣味のない話……（三四）
丸山鶴吉（總督府警務局長）……子供の散髮……（三五）
山路右近進（有隣生命支店長）……連歌の話……（三六）
堀內滿輔（ちゝぶや主人）……納涼閑話……（三七）
山口太兵衛（商業銀行實役）……京城昔ばなし……（三八）

（其の他社友數氏執筆）

サッポロビール

エビスビール

アサヒビール

京城雜筆八月號執筆者

（大體原稿到著順）

橘川克彦（京城郵便局長）……碁と謠……（二）
伊藤龍（朝鮮ホテル）……ホテル漫筆……（三）
伊藤憲郎（京城覆審法院判事）……おさなき日……（四）
武者錬三（京電會社專務）……夏の旅……（五）
野崎眞三（朝新社會部長）……新聞の嘘……（六）
高木背水（西洋畫家）……夏の夜の星……（七）
寺尾猛三郎（龍山寺尾組長）……珍紛漢語……（八）
篠田治策（李王職次官）……古名優の話……（九）
岩本善文（朝鮮鐵道協會）……新羅三姓一元論……（一〇）
安藤又三郎（滿鐵京城鐵道局長）……繪とゴルフ……（一一）
名村寅雄（大阪毎日京城支局長）……宿屋雜草……（一二）
別府西海（京城日日理事）……財界春秋……（一三）
守屋德夫（殖銀秘書課長）……古帽の記……（一四）
西崎鶴太郎（鎭南浦實業家）……臨江亭漫筆……（一六）
中村巖（京城信託株式會社）……會社辨を讀む……（一七）
石橋滿（朝明舍支配人）……お灸のこと……（一七）
今村輔（李王職庶務課長）……藥水のこと……（一八）
小野久太郎（朝鮮經濟日報社長）……私の通信經營……（一九）
名流十二家……好める景勝地……（二〇）
石森久彌（朝鮮公論社長）……水鄕の思ひ出……（二一）
蒲原久四郎（總督府遞信局長）……譯遞雜記……（二二）
佐藤作郎（滿鐵旅客係主任）……朝鮮六景……（二四）
河谷靜夫（京城日報社理事）……續十有六半……（二六）
鈴木兵作（京城本町署長）……働きの自然……（二六）
川井昌一（明治町玩具卸商）……玩具と朝鮮の子供……（二七）
工藤武城（京城婦人病院長）……硯……（二八）
中島司（殖銀調査役）……大漢門前に立ちて……（二九）
廣江澤次郎（實業家）……子供に恥づ……（三〇）
河西靑苔（京日政治部）……住めば都……（三一）
岸巖（朝鮮銀行發行課長）……水の味……（三二）
川本竹松（鎭南浦電氣支配人）……事務哲學……（三三）
有賀光豐（朝鮮殖産銀行頭取）……趣味のない話……（三四）
丸山鶴吉（總督府警務局長）……子供の散髮……（三五）
山路右近進（有隣生命支店長）……連歌の話……（三六）
堀內滿輔（ちんぷや主人）……納涼閑話……（三七）
山口太兵衛（商業銀行重役）……京城昔ばなし……（三八）

（其の他社友數氏執筆）

京城雜筆

碁と謠

京城郵便局長　橘川克彦

【二】

一、名所　行かずして名所を知る
二、旅中　旅にありて知音を得。
三、道歌　學はずして歌道を知る
四、自然　詠ぜずして花月を望む
五、社交　賤しき身分にも高位の人にも交る。
六、古事　老いずして古事を知る
七、愛情　好まずして戀の心を辨ふ。
八、武藝　馴れずして武藝に近つく。
九、戰場　軍に從はずして戰場を知る。
一〇、神慮　祈らずして神慮に叶ふ
一一、佛道　願はずして佛道を悟る
一二、慰藉　友なくして閑情を慰む
一三、治病　藥なくして病を治す。
一四、坐位　思はずして上位に登る
一五、形美　嚴ならずして形美をたしなむ。

◇

碁は若い時分からの嗜好で、隨分寢食を忘れて熱中した時代もあつたが、碁才は天禀とかで仲々上達せぬ、今の處假りに初段格を角力の三役とすれば、先づ幕下十兩どころなるべく、今一ト息と云ふ所が容易に進まない。されど下には下のあるもので、折々田舍の旅先などでは、初段位かと究飛な奇問に面喰はされ、イヤまだ四目か五目許り間があると答へて、驚嘆されると云ふ滑稽もある。是非勝たうと張込んで打つときは多く敗け負けまいと氣を緊めてかゝれば屹度勝たないまでも怪我がない。最初に餘り調子よく行き過ぎると、ツヒ油斷や慾が出て思はぬ失敗に終るなどは、當然過ぎる當然であるのに、毎に知りつゝ繰返さるゝのも面白い。今はホンの慰安的娯樂として、一週一回位自分より少し上手な二、三の常連とやる外、閑潰しか退屈凌ぎにするに過ぎない。

◇

謠は寶生流で始めてから十三年許りになる、聲量は可なりあるとのことであるが、何分性來の惡聲と不器用とで、今猶堂に入るどころか、ヤット支關を覗いた位である尤も器用な質は中途挫折し易く、美聲は却つて妙域に達し難しとかまだ碁より下手との評判らしい。碁の樣に勝負が明白でなく、碁よりも天狗が多いが、どうしても上手なものには自然に壓せらるゝは致方ない。當座の面白味は碁より薄いが、サリトテ少しやらぬと氣が濟まぬ樣な心地がする。殊に保健、修養、心氣轉換など、言ひ知れぬ妙味があるので、自分の主義として決して人には無理に勸めないが、時々同好者と會吟し、今以て稽古をつゞけて居る。チト古臭くコジ付けらしい所もあるが、嘗て或る熱心な愛謠者から送つて來た謠の十五德なるものを紹介して見よう。

◈原稿評判記

平田久雄

僕の知つた範圍で、原稿を書くことの早い人は、小野經濟日報氏だこれは『烏渡待つてくれ』と使をソコに待たせて、上著を脱ぐや否や一瀉千里、忽ち一篇の論文を片づけて了ふ▲次が朝新の野崎氏、クン〳〵と獨りで鼻を鳴らし乍ら鉛筆を揮ふことさながら飛ふが如し、そして文字は野崎式の端麗なもの▲石森公論氏も可なり早いらしい▲それから大毎の名村氏も、隨分速力に富む人らしい▲日々では別府氏が早い▲原稿のキレイな側から言へば京日の西村氏だ、これは文章も、筆蹟も共に爽氣がある▲感じの好い字を書く人に京日の寺田氏がある▲それから原稿紙の劃にキチンと嵌つて、而もキレイなのは河西氏（京日）だ▲八月號の原稿で驚いたのは寺尾組の寺尾サンの文章だ、全篇タイプライターでやつつけてある▲新聞記者以外で早い人は丸山警務局長だらう、依賴狀が屆くか屆かぬかにモウ原稿が廻つて來る▲これには僕はいつも驚いて居る▲序に書いて置くが、前號の『國境の赤坊』は到る處で、話題になつて居る▲鮮鮮の久保田さんなども大分感激せられた組らしい▲それから記者以外で美しい原稿を書く人に殖銀の中島氏、鑛業會の德野氏がある▲中島氏などは、寧ろ沽字よりキレイだと言い得る。

欲しいと云ふ。更に間もなく洗濯

京城雜筆

ホテル漫筆

——ホテル、ゾーヌから——

京城朝鮮ホテル　伊藤龍

◆

ホテル宿泊者が勘定を支拂ふ場合に、日本人はレシートの內容を調べず合計金額欄に目を通して、默つて支拂つて行く。其紙幣をぐる〳〵とまるめてポケットに捩込んで了ふ。外人はたとへ出發時刻が切迫して居ても、悠々カウンター臺に寄りかゝり、レシートを擴げ勘定項目から金額等調べ、不審があらば、オフイス員に聞き訂し、それから支拂ふのである。

日本人位面倒臭がる奴はないと思ふ。注意が肝心。鷹揚な樣子を見せる意か、なんだか分らないが、外人の樣に細心の注意を促して欲しいものだ。

◆

チップは日本人が其率割合に多しとす。チップの多いのは見榮の樣に考へて居るから可笑しい。ボーイさんは有難いだらうが馬鹿々々しくて見て居られない。外人は大概勘定高の一割內外だ。

◆

でも、悪辣な外人になると、斯う云ふ奴が居るから癪に障る。ボーイさんが笑止千萬。

なか〳〵チップをやらない。ボーイさんは、出發間際まで多少に拘らずありつきたいから一生懸命に世辭なり、用達なり、盡して止まない。

いよ〳〵自動車に乘り込む。そこでポケットから銀貨か札だか分らないが握つて出すボーイのポケットへ捩ぢ込む、とボーイは『吳れたわい』微笑みながら『サンキユウ、ベリー、マッチ、グッド、バイ』と頭をトげる。其の間にブー〳〵と自動車が動き出す。塵煙パッとあがる頃、ボーイさんはポケットの中を改めると豈計らんや五錢白銅たつた一個、ボーイ啞然として怒罵の聲さへ發し得ず。

◆

宿泊中、すべてチット（傳票）で用立てる。外人は必らずチットに署名をして自分の用立てられた事を證明する。日本人はサインを面倒がつてボーイに代署させて置くだからチットでは往々日本人とは間違が起る。

外人が忘れてサインをしない場合には、ボーイはチットを檢査して要求する、ボーイも迂濶にサインのないチットを受取る場合、それにより請求をしても外人は頑として支拂はない。『サインがないから俺のじやない』と云ふ。用立てられたのが事實だからボーイの失念を話して頂戴し樣としても聞き入れない。

實際、其場合の外人は厚ましいのだらうか。イヤよく考へて見れば支拂はざるのが當然だと云ひたい

◆

日本人は宿泊すると、無秩序に用を命ずる。悪い癖だと思ふ。其の筈だ。先づ水を持つて來い。水を持つて來ると、蕎麥が喰いたいと云ふ。それが濟むと、サイダーが欲しいと云ふ。更に間もなく洗濯物を賴むから持つて行く樣命ずるそれを運んで了ふとベルを鳴らずどこ〳〵へ電話をかけて吳れ。どうして一時間の中にボーイは十五六回往復する。思ひ當つた時に用を云ひ付ける。從つてボーイの仕事が多くなる。ボーイでも遂には面倒に成り勝ちになる。時間經濟の觀念のない奴は眞實に困る。

外人は違ふね、ボーイに用を命ずる時には其晩の事から翌日の出發までの用事をすつかり一度に云ひ付けて了ふから、ボーイは其プログラムに依り用事を運んでゆく、相互にいゝと思ふ。すべて複雜な用事でも簡單にしたいものだ。

◆

外人の人力車賃の支拂方法が面白い。一時間賃金が六十餘錢と規定してあれば、十分間乘れば十錢しか支拂はないから車夫の不平顏を屢々見受ける。二十分乘れば二十錢じやないかと云ふ。打算的に鼻を付ける。勿論乘降りには必らず時計を見る。外人はみんなそうですべてにそうだ。

日本人が人力車を傭ふて乘ると、十分位でも四十錢位は與へて居る樣だ。一體どちらがいゝのだらう

◈山元氏の事

吉田莊一

京電の山元さんは、不良雜誌新聞屋にとつては、京城隨一の暗礁らしい▲といふのは、此の人は一眼觀ると、紜ち先方の樂屋內をスッカリ見透して了ふ▲良不良の鑑識が出來る、ソコで敢然として相手を擊退する▲此の點ではどこの經理課長、庶務課長も氏の右に出づるものはないさうぢや。

京城雜筆

おさなき日

―想ひ出一つ二つ―

京城覆審法院判事　伊藤憲郎

○

S檢事の奥樣は娘のやうにハイカラでお俠であつた。子供は二人迄懷妊したが死産したとの話、奥樣はいつも大きな犬を連れて歩るいて居たので、官舍の人達は伏姫であるなどと悪口を叩いてゐたが、俺も小學校の歸り道君！あすこへ伏姫が來るよと友達に教へてやつたら、其友達が大きな聲で、エ、八犬傳の伏姫かえッテ怒鳴つたので、俺は物陰へ隱れたことがある奥樣は其犬をよく座敷へ上げるので疎相をして困ると云ふことであつた。或る日、俺達がSさんの官舍の前の池の廻りで遊んでゐると役所から退けたSさんがニコニコして玄關口に這入つたと思つたらワア、ドタンと云ふ音がした。俺達は有無を問はず、Sさんの玄關口に踊り込んだ。近眼のSさんが敷台の上で犬の糞に辷つて轉んだのである。俺達はわあと囃し立てた。

其のSさん夫婦が或る海水浴場へ遊びに行つた晩の二時頃に刑事に踏み込まれたとかの話も聞いた。どうして檢事さんが刑事なんかに踏み込まれたのか不思議でならなかつた。然し其刑事は其時Sさん夫婦と知つて其前で平蜘蛛の樣に謝つたそうだが、なんでそんならわざ〳〵夜中に人の寢てゐるところへ無斷で踏込んだらう。其譯がどうしても俺には解らなかつた。其刑事さんは風紀掛りと云ふことであつたが。

○

庭は可成廣かつた、公判廷前の植込から二寸離れたところに拘置監があつた、高い板塀が傲然と立つてゐて裁判所の大屋根へ上つても中が見えぬ、それに反感を持て俺達はよく石を投込んで逃げた。投げた石はガラ！〳〵と窓に當るらしい、未決囚はどんなに憤慨したらう、罪なことをしたものだ。今も無茶だが昔は一層無茶な俺れであつた。

公判廷の入口に面して拘置監の裏門があつた。其裏門はいつも内から鍵が下りてあかなかつたが、上のところに針金が垂らしてあつて廷丁がそれを引くと中で鈴がカラン〳〵と鳴る、暫くすると看守が劔を鳴らして出る、廷丁は被告何々と告げる。俺達は其眞似をして見たくて耐らなかつたが其針金の糸迄揃つて其れを引く元氣が中々出來なかつた。或る時、俺達はとう〳〵針金を引いた、鈴は鳴つた俺達は大急ぎで公判廷の中に隱れて高い窓に上つて樣子を見てゐると、いつもの通り看守先生劔をガチャ〳〵鳴らしてオイとか云つて戸を開けた。あたりを見廻したが誰もゐない、オイと云つて廷丁を呼ぶのであらう二三遍繰り返したが、誰も來るわけはない、ブツブツ云ひ乍ら尻の方から又門の内へ這入つた。面白い遊びの一ッとなつた。

五六日經つて、此の遊びに檢事正の息子が加つた、檢事正の息子は中學の二年であつたが落第は一度してゐた。針金はジャンケンで俺が引くことになつた、俺はグーと引いて眞先に逃げた、公判廷の蔭へ入つてあとを見ると檢事正の息子は門の側に未だ立つてゐて、此方を見て笑つてゐる。隱れた連中は來い〳〵と云ふがピクともしない。俺達は其勇氣に驚いて了つたが此始末どうなるのかと心配しながら見て居た。果せる哉、看守は劔を鳴らして現はれた。見ると檢事正の息子の外に誰も居ない、看守はなほあたりを見廻はしてそれから檢事正の息子の顔をまじまじと見た、すると突然檢事正の息子はあはは〳〵と笑つた、看守さんもはは〳〵と笑つた、俺達は一度に物陰から飛出してはは〳〵と笑ひ續けた。看守さんは苦笑して中に這入つた檢事正の息子は偉いと思つた。

◇河野氏去る

平田久雄

社友河野さん（府土木課長）京都府に轉ず、若い人で亦多大の懷抱を有つた人であつた、今更ら別を惜まない、どうか健康で澤山の仕事をして欲しい。

パイヤ（木瓜）を割りて氷を搔き

夏の旅

―赤城の夕、打狗の朝―

京城電氣株式會社　武者錬三

◆船津から川口湖を渡つて數島（煙草）の畠は此處から取つたといふ美くしい富士の眺めを賞し、西湖を渡つて數里に亘る太古の如き青木ゲ原の所謂樹海を道案内を賃して通り抜け、龍窟に垂氷を採つて夏の暑さを忘れ、精進湖の幽翠、本栖湖の靜寂に日のかげるを忘れ、次第に脚下に迫り來る闇を僅に夢の如くに淡はく浮き出でたる富士の頂きの光りに照らして、見渡す限り大浪のうねれる如き裾野の原を數里が間友と唯二人遭ふ人とてもなく稽ふ人家もなく木樵の細道を人穴に出で、上井出の宿に靜かなる筧水の音を聞きながら狩屋の事蹟を語らひ、白糸の髓水に涼を取り淺間神社の溢るゝ池水に汗を拭ひ、富士川の急流を渡りて身延に日蓮の行跡を訪ね、沼津に出でゝ海に浴したるも風趣多き夏の旅の一つであつた。

◆大間々にて赤城の夜風に衣の襟を掻きあはせ、水沼から流るゝ汗を溪水に洗ひながら鳥居峠を登りて赤城山頂の楢白樺の生ひ茂れる大沼湖畔に夏とも覺えぬ多にもあらぬ身に泌み透る山の冷氣に一夜を明かし、足尾より鑛毒にて青草一つ生えぬ阿世潟峠の砂礫の峻嶮を草鞋の裏も焦け著くばかりの炎天に突破して、綠滴たる中禪寺の湖心に白帆の小舟を泛べたる涼味は忘れ得ぬ夏の旅の一つであつた

◆須磨より磯岸傳ひに垂水、鹽屋舞子と歩きて明石より淡路に渡りて岩屋に釣を垂れ、又湊川より上流を遡りて山田村に南瓜と鱠汁の御馳走に舌皷を打ちながら里人の盆踊に夜を打興じ、有馬に出でゝ湯に浸たり、生瀨の山峽に涼しき月を賞したるも須磨の海水浴に夏を送れる折の思ひ出の旅である。

◆基隆より旅の財布を打忘れて汽船に乘り込み、飛魚の飛ぶ夏の靜かなる海を蘇澳、花蓮港、台東と新高連峰を海岸間近かに望みつゝ南下して、遙か南方呂宋の冲に發生し次第に北上するといふ低氣壓の警報に愕かされ、次第に船の動搖を感じながら、臺灣の最南端鷲鑾尾の突角を夜遂に襲ひ來れる荒天の魔の如き眞黑き怒濤に翻弄せられつゝ突角の上に燦として闇の南海を照らす燈台の光りを唯一つの頼りに五日目の正午打狗に入港し、留守宅より屆け呉れたる金を出迎ひの友の手より受取りて、船中一切の借金拂ひをしてホット息つきたるも、或る夏の旅のことであつた。

◆同じとき、打狗の吾妻に其の夜客を案内し置き、阿候の東洋第一といふ製糖工場を見に出かけたる折、餘りの暑さと渴に耐えかねて椰子檳榔の繁れる公園の樹蔭にパイア（木瓜）を割りて氷を掻き入れ嚙りたるうまさに、今少しと遂に汽車に乘り遲れ、電話にて打狗の客に勝手に宴會をやつて呉れと斷りたるも、旅の罪なき失敗の一つであつた。

◆同じとき、臺南から台北への歸途、汽車の中は勿論百度以上の暑さで誰も皆行儀どころではなく大肌脱ぎで暑氣と無聊に苦みたるが家苞にもと苗栗にて驛の賣子から買ひ込みたる數箇の水瓜（此處の水瓜は美味に於て島内第一の稱がある）汽車の搖ぎに床の上をころがりゐしが、何時の間にか同乘客とおほかた平らげて、飯も食はずに水瓜ばかりで一日の汽車を乘り暮らしたるも、面白き夏の旅の慰みであつた。

◈新義州から

加藤松林

新義州だけすませました、一寸來るつもりが意外に永くなつて、それにまた意外に成功で御座いました▲知事と、三宅支店長が大變骨折つて下すつて、會場で約十八九枚出ました。それと、鮮展出品の南鮮の春を道廳で買つてもらひました▲この土曜に義州に行つて日曜の夕方歸るつもりです。その次の日曜は安東でやります。この兩地で、もう十五六枚も出ると、一度に成金になりますが▲國境は毎日雨ばかり、風物も只蕭條として――でも落ついた氣持ちであられます▲お土産は何かいゝでせう、坊ちやんはいかゞです、どうか御大切に（七月十日夜）

京城雜筆

新聞の嘘

朝鮮新聞社會部長　野崎眞三

○

よく世間の人は新聞は嘘が多い、與太が多いと識る。全く新聞にも嘘が隨分ある、例へば十七日夜東四軒町の强姦未遂事件の記事で京日では被害者の名が泰榮熙で朝新も同樣、日々だけが秦榮熙となつてゐる。之は記者の聽き違か見違であり被害者はドッチか一人に違いない。更に犯人の手係りが現場に遺棄された下衣のポケットの印章と詳細に朝新は說明してゐるが他はボンヤリ證據品とある。又犯人の住所が京日だけは光熙町二ノ一九であり他は光熙町二ノ一九四である。僅に此一事件だけでも各新聞が相違して居り一を事實とすれば他は結局嘘である。

○

檢査して來ると府內の三新聞だけでも毎日素晴しい誤謬と嘘が散見する。此等の嘘に就いて考察すると善意な嘘、不注意からの嘘、宣傳の爲の嘘、惡意の嘘等がある。善意の嘘と云ふのは記事に他人の迷惑を顧慮して嘘を書く場合もある、又血塗れ騷ぎ双物の斬合など大低の場合に記者は目堵せず當時の模樣を綜合して合理的に推斷する、之も嘘と云へば云へやう。更に他人からの又聞きを信用して嘘を書く場合もあるが、斯うした嘘は世間からも許されるものと信ずる、許されないとした處で記者としては如何とも出來ない、果して世間が之を嘘として惡むなら我々は歷史の大部分を嘘と云へる、今日迄の日本歷史は有產有識有權階級には或は眞實としてもプロレタリヤには全部が虛僞だと云へやう

○

不注意からの嘘、之は時間に制限され繁忙な劇務を執る新聞記者には有勝ちな缺點である、例へば原稿締切の時間の關係で事件の終を推斷して書く嘘である。松方公が屢々生死を新聞で傳へられた例も適例であろう、從つて新聞記者は最も敏感で最も聰明でないと飛んだ嘘を書く事がある、此點は我々が不斷の注意を怠つてはならない

次が宣傳の嘘、支那の文章には白髮三千丈等の語句が多い、丁度記者なり新聞社自身なり或は官廳其他の宣傳の爲には嘘を屢々書く。新聞社の主催物が寂びしかつた事はない、屹度未曾有の大成功を示す、人員等も見積が大袈裟に過ぎる、モット甚だしいのは惡德記者の惡辣な金儲けの具となつて白を黑と云ふ場合もある、此種の嘘は毫末も許さるべきものでないのを新聞の威力を怖れて泣寢入の場合が多いが甚だ惡むべき非行である

○

惡意の嘘、之は前同樣記者なり新聞社の感情から生れる非行である嘘である、と同時に新聞記者への談話に一ぱい喰はす人がある、之も惡むべき事で最近日々に惹起した名譽毀損の訴訟事件も斯うして生れたらしい。更に同業者同志の欺き合ふ結果、相手の惡意の嘘に乘ぜられる事もある。斯う考へて來ると新聞は嘘だけに思へるが事實は決してそうでない、我々はペンを握つて原稿紙に向ふと神の前に立つ敬虔さを失はない、白紙の態度になるのをモットーとしてゐるが、然し正鵠の判斷を失つた白紙ではならないと思ふ。結局嘘が嘘でなく新聞記事の堆積が社會人の經驗と共に智識となつて行くのであるから嘘必ずしも嘘でない。新聞記者が神樣でない以上審判は出來ない、世間が嘘と欺に充ちてゐれば結局、新聞紙にも嘘が反映して嘘が多くなると思ふ。諸君、新聞紙の嘘を責める前に自らの環境に嘘の餘り多過ぎる現實を考察して欲しい（一三、七、一七）

◈頭取の碁戰

吉田莊一

殖銀の有賀頭取は何しろ忙しいので、好きな碁を樂む暇もないらしい▲が鎭南浦の西崎氏が入京した時は特別で、少々の用事は打擲つても烏鷺を樂む▲先日も兩豪が浦尾で熱汗を揮うて、猛戰して居たが、どうも頭取の形勢が好い▲斯うなるとアノ上品な人も頻に破顏一笑、傍の德野君を顧みて『オーイどうだ』と肩先をコツン▲西崎氏が得意になると、義太や浪花節の飛び出すのと好い對照だ▲何でも西崎氏は、この復讐はせにやならんと慨然として居たから、內地からの歸りには、いづれ火の出るやうな血戰が始まることだらう。

夏の夜の星

天文學會々員　高木背水

◆『凉臺又た初まつた星の論』昔の川柳だが平和氣分が香つて居る夏の夜の天空は蒼々として雄大無限な宇宙を物語り。大小無數の星は思ひ〳〵に痛快な光を放ち、銀河はカシオペヤ星坐を起點として斜に大きな橋をかけてる。

◆近來種々な新聞雜誌上に毎度通俗天文講話が見へる樣子、之は一般人士が追々天體に眼を注ぐ前兆と思へば結構な事だが、困つた事には亞米利加人に最も多い曲學阿世の素人ダマシの駄法螺が再三現れるのは營利本位の僞學者の罪である——抑も天文學と云ふものは一番古い學問であるが何分研究が困難であるが爲め一番幼稚なものとされてる。

◆往古の人類は太陽を目して火の神となし甚だしく夜を恐れた、つまり夜は神樣が居らず物は見へず猛獸等は勝手に荒れ廻る。天空に輝く無數の星は何物であるかとは先づ第一に何人の頭腦にも浮ぶ問題である。原始時代の人類は生活が簡單で從つてのんきで又非凡の觀察眼を有して居つた。且つ又想像力にも富んで居つた。暇に任せて天體觀察は驚く可く進んだ、人類が生れては死し新陳代謝をする何人も死を恐るゝが王者の權は得らるゝとも死の運命は免れ難い。其處に靈魂問題が起り又人生の運勢を知りたがる、運勢の判斷には一大不可思議なる夜の空に訴へて星坐の運行に依り誰は何の星に當ると云ふ風に信じた——其の當時何の機械もなく肉眼を以て精密な觀察をした。

◆支那では四千何百年前に立派な觀測をして書物に存じ今日歐洲の學者は正確なるものとして大いに斯道研究の參考に供してる。西の方ではメソポタミヤ、アッシリヤの文明時代に天文學は大いに進んでピラミットも出來たが永い歲月に風化されて形を留めず、其の敎へを受けたエヂプトのピラミットは今でも立派に殘存してナイル河邊の熱帶地に偉觀を呈してる。此のピラミットは何物であるか何の目的で造られたかとは多年の問題であつて大體は國王の墓であらふと謂はれて居つたが最後に說明を與へたものは今から二十何年か前の天文學者であつた、彼等は夜間にピラミットの內部に入つて穴道の角度を計り其れが太陽の子午線經過を觀る爲めである事を發見すると共に研究の歩を進めつゝやがて言語學者等がエヂプト古代文學を解し得るに至り古記錄に依つて追々古代の樣子が解ると共にピラミットの眞相が確定した、國王の墓でもあり天文臺でもあつた。

◆最初國王が生れると先づ其の運勢を判ずる必要上大天文臺を設けて星を觀測した其の間は天文臺として用いられ、やがて王が死ぬと其れを墳墓として死體は木伊乃となし其處に安置し其上に又石を積み上げて金字塔を造り其のまゝ永久に存した——其時代のエヂプト人は人間が死んでも靈魂は存し後年復歸り來るものと信じ肉體は魂の宿として死體を大切に保存した

◆今日の天文學は往古の運命問題とは全然沒交渉な立派に獨立した科學であつて機械の進歩と其他物理學の研究と相待つて頗る細密に渡り專門が專門を生んで天體力學を土臺とし天體物理學、光學物質學と分れ近來は太陽面の黑點と地球上の氣象とが一致する事を發見して太陽氣象學が起り亞米利加では富豪カーネギーが巨資を投じてウヰルソン山頂に口經六十吋と云ふ世界第一の大望遠鏡を備へて專ら太陽研究をしてる——俗世間では學問と云へば閑人の道樂位に思はれて就中天文に至つては人間放れして居る樣であるが前記太陽氣象學が成功した曉には地球上の氣象の變化を前以て知る事が出來て航海者、漁業、農業家其他に莫大なる福音を與へるであらふ。

◆吾輩は畫家として最初は夜の空を觀て誤らぬ樣にと云ふ豫備知識の要求から學會に入つたが科學以外に古來詩人が咏ふた神話が中々面白くて吾が本職の畫題と能く一致する、外光派の風景畫家として見ても星の夜の壯觀は一大名畫を形作つてる其處に時々流星が右往左往に尻尾を引いて曲線の矢を描くも又美觀を補ける。

◆星學上では月面の研究は能く行き屆いて地球上での亞弗利加內地より以上に解つてしまふて價の無いものにされてるが畫家、文人、詩人の眼には天體中で一番價があるのは月である。亦た月は夏の夜の凉み臺を賑はせる最大の愛嬌者でもある。

京城雜筆

京城雜筆

珍紛漢語

龍山寺尾組　寺尾猛三郎

○執筆！宜ろしいと受込んだが愈々明日は原稿締切りだ、何んとか責を塞ぎたいと出鱈目を列べて見る。

○漢字制限論の羽振りの好い今日とは云へ、苟も漢字を廢しない限り突飛な珍紛漢語を連發するは意思交通機關の大障害と云ふべしだ茲に面白そうな例を二三擧げるが銷夏の料にはならぬことは請合だその御積りで。

○日露戰爭の最中余は甲某と共に平壤から安州に赴かんとする途中荷持の人夫を傭ふ必要を感じたが甲某は突然一鮮人家屋の前に佇み君此處に人足が居ると叫ぶ、見れば門戸に貼られたる紙片に『家給人足』の四大文字あり、家に人足を給すと漢文式に讀んだは洒落にしても奇想天外と言ふべしだが、甲某の大眞面目なだけに洒落を超越した滑稽味に腹の皮を撚つた。

○余が書翰を認め封筒の表面に侍史と書きたるを見たる甲某は、君返事は要らないのだろうと云ふ、余はウンと答えて置いた、侍史の侍を待つと讀んだのだ、之なぞ罪が無くて好いが、甲某は堂々たる風采と毬々たる髭鬚の所有者で物識り顔をする癖がある。

○保元物語の一節に、快男兒鎭西八郎が義朝始め滿盛一輩を吹き飛ばしへろ〳〵矢云々と氣焰を吐きたるを、山陽が才筆を以て鎧袖一觸の四字に片附けて漢文の莊重と簡潔の妙を示して居る。或る處で乙某が演說を遣つて、一結千鈞の力を示す爲め『鎧袖一瞬』でありまずと大見得を切つたが、折角の慷慨悲憤も滅茶苦茶だ。

○普通の士人は尙ほ怨すべし、文筆を以て世に立つ操觚者と云ふ連中の珍紛漢語は、皷を鳴らして責める必要がある。大低の新聞雜誌に少しく注意すると誤字謬句の夥しく用ゐられて居るのに驚く。余は天正二年頃順天堂に入院し無聊なる儘新聞紙の迷文を日記に誌して置いた。試みに拔萃して示し見ませう。

○東京大阪に跨りて大新聞と稱せらるゝ甲某紙の斷簡的記行文中北越方面の山水を形容して『激流奔湍滔々として暴虎馮河の勢凄しく』云々とある。驚くべき亂暴な水があるものだ。

○南京事件勃發して民間に出兵說囂々たる際、米の飯を以て任ずる某紙に『出兵するは餘りに事大主義に過ぐと論ずるものあれど』云々と堂々社說欄に論文を揭げた。記者先生は事大主義なる熟語を餘りに事を大きくする主義と解釋して居るのだ。之れを英米の鼻息を伺ふ點を事大主義と評したとするなら益々其行文は支離滅裂となる外は無い。檢査濟の朝鮮米に石の交つた形だ。

○乙大新聞に張作霖と馮麟閣を評し『是れ畢竟彼等が出藍の馬賊にして處世巧妙』云々とあるが出藍の馬賊とは餘り巧妙な字句でない

○同じ乙大新聞に眞に人なしと題し『下院纔に薩南の床次氏……乳虎やゝ變すべきのみ未だ百獸の肝膽を破れしむるに足らず』云々と母虎を兒虎にして了つた。熟語を勝手次第に使用する處が珍紛漢語だ。

○又乙大新聞（余は乙大新聞の愛讀者だ）に何嘗まで引摺られて行くかと題し『これでは多年螢雪の苦心を積んだ政友會の地盤を根底から蹂躙されることになる』云々とある、螢飛ぶ夏の夕、雪降る冬の旦、東奔西走したとでも解釋して置くかな。

○京城の某紙の寄書欄に弱獨我觀と題し『獨逸の强大を論ずるに方つても其民族關係乃至史的事實から推敲して評論を加へ』云々とある、推敲なる文字が此んな處まで用ゐられやうとは賈島も韓退之も氣が注くまい。地下で微笑して居るだろう。

○某紙に揭げられた某縣人の田子氏の激勵文中『護憲の假面を被り來つて故總裁の遺髮を繼ぐと呼號す』云々、之れなぞフトした誤りだろうが、白頭總裁だけに遺髮を繼ぐの五字が面白い、慥に傑作だ

○京城の新聞には大部あるが、餘り憎まれ口を叩くと碌な事は無いから擱筆する。落語家では無いが他人のアラで責を塞ぐ段は恐れ入ります。

◈朝鮮六景記

吉田莊一

旅行季であり、且つ避暑季であるといふので、京鐵局に賴んで『朝鮮六景記』を書いて貰つた、この事に就て同局の若曾禰氏には一方ならぬ御面倒をかけた、茲に厚く御好意を謝します。

最も我儘なる贅澤者であつた、朝

古名優の話

法學博士　篠田治策

元錄時代の名優坂田藤十郎のことは、菊地寛氏の小說や、戲曲又は、中村雁次郎の芝居『藤十郎の戀』などで知られて居る如く、彼は密夫に扮する狂言をやる前に、人妻の愛を弄び、遂に死に至らしめたといふやうな事が傳へらて居るがこの位自己の藝術に熱心であり、又收入の多かつた彼は、一面に於て非常に贅澤な男であつた。或る書物によれば彼が『高給銀を取りて大阪へ抱へられし時、京より水を樽詰にて取寄せ、飯米は一粒づつ選らせて用い』たのである。この贅澤の辯解が又慈々贅澤であつた。曰く『私全く奢にあらず、當芝居主、拙者を抱へらるゝに大切なる金銀を出し賞はれたり、米に砂あつて若し喰台せ、齒を損じなば、舞臺にて、セリフ洩れて聞こへ兼ぬべし、又年頃飲みつけざる水を飲み、若し腹中など惡くなり一日にても舞臺を退きなば、芝居主への義理濟まず、斯樣に身持養生に心をつけて、此の上身分に故障出來る時は是非なし、依つて斯くは申付くるなり』と。又他の本には『尤も身動きもせずに六百兩の給銀、齒一枚が何程にならうも知れ』ざる故に飯米を一粒づつ選らせて用ひるのだと書いてある。まさか此時代に、朝鮮米の宣傳でも無かつたであらう。又江戸の名優中村七三郎への進物に、加茂川の水一壺を贈つたこともある。八文字屋自笑の藤十郎の傳記には、

『……世に名を知られ、三か津の芝居にて名人とも言はるゝ者は、大氣にして細かなる事を聞きも見もせぬものぞかし。是れ大丈夫の役者氣といふものと、愈々朝夕無理穿鑿、身に洗濯の小袖を著す、夜、蠟燭の光よりほか油火といふもの居間にも點さず、不斷の料理に魚鳥なくては飯を食はず、食後に濃茶一服づつ定まつて飲み、伽羅を燃やして酒の燗をするなど向上なる穿鑿なり』

とある。又彼が江戸の初代市川團十郎の訪問を受けた時のことを、『歌舞伎事始』で見ると、恐ろしく贅澤の氣分が見へる。

『元祖市川團十郎、坂田藤十郎が藝を見んとて、わさ〳〵上京せられけるに、折節坂田氏病氣にて舞臺へ出てず、市川氏殘念の事に思ひしに、藤十郎便を以ていへらは、偶御登りの事に候へば、せめて東山邊にて粗酒進じたき田申送る。團十郎も辭退なく行きけるに、藤十郎座敷へ出てず、市川氏腹立しける體見へし時、向うの座敷へゾロリとしたる姿にて立出て、活花などして又入りければ、彌々市川氏不興にて既に歸らんとせし處へ坂田氏人を以て、無御退屈に候はん、唯今御眼にかゝらんとて髮の體を改め、威儀を正し、立出で對面しける。其行粧、流石の市川氏、狂言見るに及はずとて、其翌日江戸へ下りける。さて江戸にて言へるには、藤十郎存生のうちは京へ役者登りすまじとなり』。

とある、流石の團十郎も藤十郎の贅澤に膽を奪はれたのであつた。當年の名優藤十郎は斯くの如く、最も我儘なる贅澤者であつた、朝夕無理穿鑿といふ句は、よく此我儘と奢侈とを表はして居る

近時に於ても藝術家には往々斯の如き氣分がある、彼等には亦莫大の收入がある、現に總理大臣の俸給に十倍する給金を得る俳優もある。彼等の贅澤は其得るところを以て、之を內に散ずれば一種の社會政策ともなる故に、必ずしも之を咎むべきでない。

人間には慾望がある、贅澤も亦慾望の一つであつて、慾望を滿足せしめんが爲に、人類は進步し、生活は向上する。木に巢くひ、魚介を生食し、裸にて步いた時代から今日の文明に進んだのは、人間の奢侈を好む性質からであるともいひ得る。向上心とか、優越慾とか積極的活動とか云ふことも、奢侈を好む心理と同一である。東山殿の贅澤は新しき禪宗の趣味を取り入れて、日本人に閑雅幽寂の趣味と生活とを敎へ、俳句といふ詩の中の醇の醇なるものを創造せしめた。秀吉の豪奢は又當時の活潑なる時代精神を巧みに刺戟して、日本人に豪華雄麗なる藝術を創造せしめ、海外雄飛を考へさせた。史上に輝く英雄、天才にして奢侈を好まざる者は稀である。世俗の事に無頓著で、貧乏を意に介せざる如き天才も、其心持は最も贅澤である者もあつた。銀猫を往來にて嬉戲する兒童に與へて、飄然と立ち去つた西行の如きは此例であろう。

贅澤必ずしも咎むべきでは無い、されども、贅澤をなす前に、先つ藤十郎の收入を得よ、贅澤をなさんが爲めに、大に活動し大に生產せよ、入るを計つて出づるを制せざる贅澤は只破滅あるのみだ。

史實研究

新羅三姓一元論

朝鮮鐵道協會　岩本善文

新羅三姓の起源に就いては古今の學者が未だ其眞相を明かにすることを得ず、千古の疑問として今に其解決を見ない問題である、それを素人の私が兎や角云ふことは、或は斯道の學者に對して聊か僭越かも知れないが、素人には又素人丈けの議論の有る所を、茲に述べて見たいと思ふ。

新羅の三姓とは、其王統たる朴昔金の三姓を言ふので、此三姓の王統が交る〳〵新羅の王位に即いて國家を統治し、其三姓交立の間何等の問題が起らず、恰も當然のことの樣にそれが行はれたことに就いて、歷史學者は非常の興味と疑問とを有ち、隨つて古來議論百出今に其解決を見ない始末である、私が茲に述べんとする所は、此三姓を各其始祖の稱號から見て語學的に解釋し、言語の方面から其處に何ものかのヒントを得んとするものである。

私は新羅の古史を讀んで、每に此三姓が其實同一王系であらうとの推測を下し、此方面に向つて研究の歩武を進めて居るが、茲に述ぶる所は其研究の一方面であつて、而もそれはまだ研究の中途に在ることを豫め斷つて置く。

新羅朴氏の始祖を、朴赫居世居西于と云ひ赫居世は又一に弗矩內とも言ふ、朴は姓、赫居世は名、居西于とは王と云ふ新羅の古語である、而して現存鮮史の傳ふる所に依れば、赫居世其始め大卵より生れ、其卵の形が瓠に似て居たので羅言瓠を박と云ふ所から、取つて以て朴（박）の姓を名乘つたのであると言ふ、しかし其當時東方にはまだ姓を稱へる支那の風俗が傳はつて居なかつた筈だから、隨つて赫居世に姓のあらう筈がない、其處で此朴とは、朝鮮語の밝の意即ち『明』と云ふ形容詞であると云ふ、一部學者の說を私は正しいと思ふ、밝の己がサイレントになつて밝と發音することは、現今でも同樣である、次に赫居世の赫も是れ亦此밝の漢字意譯で、朴は其音を取つて姓とし、赫は其意を取つて名としたまでゞ、兩者の出所は二つ共に밝である、赫居世の居世は、居西于の居西と同音同義であつて、新羅三代儒理から十八代實聖までの稱號尼師今の尼師とも同音同義であると思ふ、此居世、居西は『イサ』と發音すべきで、『居』は朝鮮語の잇全の잇、我國語の『居る』の『ヰ』である、世は鮮音세、西は鮮音서で세とも發音する地方がある、ㅓはトに轉訛するのが朝鮮音の通則であるから세、서は共に사となり、居世、居西は이사である、尼師今の尼師は此の發音のまゝを漢字に現はしたもので、即ち此鮮音は이사である居世、居西、尼師共に이사であるとして、其意味は何であるかと言へば、我祖神伊邪那岐、伊邪那美の伊邪と同語、私は之れを人君を指す日鮮古代の土語であると解釋し度い、何となれば我國語の『長』は『オサ』であり、又馬韓辨韓の古語に邑借と云ふ職名があるから、『イサ』は此『オサ』と同一語の轉訛であると解せられるからである、又居西于の于、尼師今の今は、我國の君、神と同一語で、カン又はクムであり、クムは金（금）の漢字を當嵗める場合も發見することが出來、貊のコマから轉訛した權力者に對する敬語である故に朝鮮人が內地人に對して『令監さん』と云ふ如く、又我國語の『殿樣』等と云ふが如く居西于、尼師今は敬語の重だつたもので、朴赫居世居西于はも一つそれが重つて居るが、結局之れを省略すれば赫居世即ち『明王』又は『明主』の意義より外に出でないことゝなる、更に又の名弗矩內は、弗は其音불で、불は鮮語火である、矩內は거뉘（矩音于）で鮮語の『出す』と云ふ言葉に相當する、即ち弗矩內は불거뉘で、『火を出す』と云ふ言葉である、『明王』又の名は『火を出す』、これが即ち新羅初代朴赫居世居西于の包有する言語的意義である、故に此『明主』の『明』は『火』に對する明であつて、我天照皇大神等とは其觀念を異にし、其の『明』は『火』より出でた『明』である、此意味に於て赫居世は『火明』又は『火照』の意であると推定することが出來る、『火明王』、『火照王』果して然りとすれば私は天孫瓊々杵尊の皇兄火明命及同尊の長子彦

火出見の御兄火照命を連想せざるに贊する、金閼智！、之を意譯すれば『王子』と云ふ言葉である。

は脫解の故國に於ける落胤にして脫解王位を繼くの後瓠公をして呼

火出見の御兄火照命を連想せざるを得ない、火明命は尾張連の祖又火照命は肥の隼人阿多君の祖である、肥と火、私は此『火』の出處を『肥』に見出すことが全然架空な空想でない樣な氣がする。

しかし以上は朴氏の始祖に就いての考察であるが、三姓一元論は以上、『火』と『肥』の對照から出發して、昔金二氏の言語的意義を考察することに於て、其論據を見出し度いと思ふ。

昔氏の始祖は昔脫解である、之に付いても鮮史は種々附會の說をなして居るが、私は之を採らない、私は此昔脫解を鮮語の漢字譯として考察して見た、昔脫解を鮮音に譯すれば석달히である、석は석とも言ひ、鮮語『小さい』と云ふ言葉となり、달히は달히又は달이となり『月』と云ふ言葉となる、昔脫解『小さい月』赫居世の『火明王』と對照して面白いコントラストではあるまいか、しかし私は此달이を更に아달이、알이の달이として『小兒』の意を含んで居るものと見た、小兒！、それは親に對する言葉でなければならぬ、昔脫解を『小さい月』『小さい兒』と言ふには、『火明王』たる赫居世との對照として其處に親子の關係を見出さねばならぬ、而して『火明王』の『火』は『肥』であるとすれば、脫解の生國倭の多波那は、肥後國玉石郡であるとの說が、此處にも亦面白いヒントを私に與へる。

次に金氏の始祖を金閼智と云ふ、金閼智の金に對する鮮史の解釋は牽强附會である、結局『金』は『今』『干』と同義にして、王と云ふことを意味し、閼智は鮮史謂ふ所の『小兒』の義であると云ふ說に賛する、金閼智！、之を意譯すれば『王子』と云ふ言葉である。

當時脫解瓠公が金閼智を遇すること、之を『王子』と見て始めて首肯し得る事柄のみである、脫解は新羅本紀に據れば河珍浦に於て卵から出生したと書いてあるが、駕洛國記に據れば、其首露王訪問は青年時代である、或は疑ふ金閼智は脫解の故國に於ける落胤にして脫解王位を繼くの後瓠公をして呼び寄せたものではあるまいかと。

兎に角脫解、金閼智共に、『小兒』と云ふ言葉であることは、新羅三姓一元論を大成する上に有力なる資料であらうと思ふ、姑く記して以て學者の考察に讓る。

（一三、六、一三）

繪とゴルフ

滿鐵京城鐵道局長　安藤又三郎

私の繪に親しんだ動機だッテ、動機のヘチマのと、何もそんな大した理由はないよ、併し强いて云へば幼少の頃から、私の父が繪が好きだつたゝめ其感化を受けたわけだ。鄕里が美濃で蓑老の瀧が近いので、其の老を取つて父は老山と號した。私は天成の無風流漢で、自分で畫くとは駄目だが眼だけは相當に肥へたよ、無論近頃流行の印象派だの未來派だのナンテいふ方面のことは知らぬがまあ日本畫殊に南畫といつた方のものが好きだ。さうさ數十點位は所藏してゐるよ。

私のゴルフかね、ゴルフなら大に自信がある、と云つて別段技術がウマイのではない、つまり私はゴルフの讃美者なんだ。何しろ中年以上の者の運動としてゴルフ位適當なものはない。といふことを敢て大聲に公言したいネ特權階級のみの遊戲だッテ？、そんなことはない亞米利加あたりを見給へ、猫も杓子もやつてゐるんだ。

一體私は數年前からゴルフの倶樂部を組織したいと思つてゐた位なんで今日京城でも非常に盛んになつたことを喜んでゐる。ゴルフでは、私も先驅者の一人だよ。

京城雜筆

宿屋雜草

大阪毎日新聞社
京城支局長
名村寅雄

宿屋を通じて地方色を觀るのも旅中の一興である。

たとへば、北陸や東北やの多の宿屋が炬燵を入れるのは如何にも雪國らしくはあるまいか、青森や長野や金澤や福井あたりの宿屋がともせば低い軒端に、雪ずりの用意を屋根に拵へて、さて部屋にはいれば冬など、まつ晝間でもほの暗い所、どうしたつて雪國の色ではないか。

そこの邊の宿屋の調膳からも地方色を窺へるではあるまいか、表日本の明膳（？）裏日本の暗膳（？）さでも言へやうか、一つはあつさり、一つはもつさり、であらう伊勢あたりの宿屋は朝つばらから例の伊勢えびを惜氣もなく二の膳におつぴろげる所、如何にもそれの大量生産國らしい、多の北陸の宿で、あの大蟹や、小蟹をつけ、秋田や青森邊で、はたハをつけるのも地方色を出してゐまいか、名古屋を中心に朝膳の味噌汁が八丁みそであるのもうれしい地方色ではあるまいか。

いやなのは『參詣宿』である、團體客を迎へる宿屋位い諸事型にはまつて、非團體宿泊者にイヤ氣を起させるものはあるまい、京都のそれの如きである、調膳も只百性喜ばせの多景にして惡質なるものを並べる、朝つばちから、へんなまぐさものをつけ、おまけに二の膳までつけてそれにへんちきりんな、ライスカレーでもがのつてゐると來るから、お膳樣と相顧みて苦笑する外あるまいではないか。

近頃東京や大阪で、チャブ臺を採用してる宿屋がある、夫婦差し合つての旅行なら尚ほさら、でない單獨でも、このチャブ臺一つのために馬鹿にゆつたりした氣分になれるから妙だ、且突く氣分の擡頭とでもいふのか？それで上には汁に浸しものにあつさりの乾物、氣の利いた清物位とあるから恐ろしくいゝ氣持ちになる。

このチャブ臺式の宿屋は間代制度食事料式である上に、女中のチップまでも一日いくらと決めてあるから、旅人の宿屋苦勞の少ないこと甚だ妙である。旅に出て宿屋のためにあたまを使ふ人は少くあるまい、その人達に取つてこれ位いの氣安さはないと言つてよい。

女中の情味といふ奴が、旅人に對して肝甚であること言ふまでもない、美醜は論外、只情味である、時に情味たつぷりの女中にでもプツ付かると、家の山の神に不信任を表したくなることも稀れではあるまい、所でコノ女の情味といふ奴が又地方によつて濃淡があるから面白い、但しここでいふ情味は單に表情のみであること勿論、それ以上込みいつた所の厚薄は別にある、たとへば北陸一帶の女性は人に接して何となう人懷しさがあり、男性をひきつけ易い、がその實この地方の一部には恐ろしく薄情な所があり、越後女が吉原女郎に向くのも、その女性が男に薄情であり、從て樓主には安心罷り成る女性だからとある、所で新潟女といふのが、とつゝきがいゝのだから、フット、はまり易い、而も眞實は薄情とあつて見れば、うつかり表情味にのせられぬこと旅人の要心所であらうか、結局は自然の親切と情味とを持つ女中が一番歡迎すべきか、さても難かしい要求である。

風呂場にも地方色が出てゐる、清楚と、濃扮と垢臭い風呂場、隣りの便所の臭氣のプーンと通つて來る風呂場、これ等はこけの骨頂、旅心地をこわすこと夥しい。

宿屋の名前が又妙に宿屋の格をしのばせる、丸福だの大福だの森龜だの大丸だのゑびすやだのいふ名は何とはなしに第二格以下を思はせるが、青濱館だの天眞樓だの五明館だの、遼東ホテルだのいふと何だか上格宿らしく思はせはしないか『名前と品と』宿屋名をつけるにも先づは品よいものを選ぶべきではあるまいか。

一風呂浴びて一杯かたむけてさて陶然となつた頃、按摩の一つも採ませやうことが旅の寛つたりさを味はせるとする日本人にはドウやらホテルはバタ臭くてぎこちなくて、殺風景である、それにそのホテルも西洋の所謂ホテルらしさだけはあるが、隨分と行屆ぬホテル振もあるではないか。先づは一杯のおり、ざれ口の一つもたゝける日本娘の日本宿がいゝとせずばなるまいか、ましてや馴れつこになつて、客の好き嫌いから、旅の上の遊び癖まで知り拔かれるまでになつた宿屋は、時に妾宅へでも出張する氣がせぬでもないではないか。（七月四日）

打ちの出來ゑ者はなかつたらしい

京城雜筆

財界春秋

鈴木穆君

京城日々新聞社　別府西海

◎鈴木穆君を一言に盡すと惡評に包まれてゐる人とも見得る、十人十色といふが鈴木君に對する十人の批評を聽くと、恐らく九人まで若くば九人半までアンチ鈴木黨たるを知り得るであらう、威張る、官僚的だ、自分許り饒舌る、人を馬鹿にしてゐる、ケチだ、大抵そんな風に口を揃へていふ。

◎冷靜に之等の鈴木穆君論を聽いてゐると、鈴木君の事はわるく言はぬと通じがよくない、と云つた風の氣分を多くの人はもつてゐるのではないかとも思はれる、何故ならば鈴木君にあつた事もなく、又鈴木君の人物を知つてゐやう筈のない者まで鈴木君のわるロを言はぬと損のやうな面をしてゐるからである、然しこれは對鈴木君の傳統的批評がよくないのと、その君の對人的態度に不用意があるのと、又君の不德の致す所だらう。

◎記者は君を土地調査局長時代から知つてゐる、度支部長官として又其後の鮮銀重役として――がいつ行つて見てもよく語つて呉れる言葉も叮嚀――幾分ワザとらしい所はある――なら態度も尊大ぶるといふ點を多く見ない、唯自已の所論を絶對權威あるものと確信してゐるらしい調子はある又容赦なく記者等の質問に對しても論鋒を向ける所はある、君にあうてからの印象は河内山樂三君や、和田一郎君等を訪問したあとの印象より何となく窮屈で不快な或るものは殘る、然し少なくも世評程惡い人でなく、威張る人でなく、官僚的の人ではないやうだ、換言すれば君は實質以上にわるく評されてゐる。

◎朝鮮の財界にも相當人材はある但し君位財政經濟に對し意見の多い又鋭い人は多くない、如何なる問題にも一家の說を持ち、それは時流を拔き、幾干か離れた識見より論を立ててゐる、多年半島の財務に關與し、表裏共に通曉してゐるからではあらうが、少なくも平凡な無爲な材幹でない事は慥である、如何なるアンチ鈴木論者も此の點に於ては君の人物を認めてゐるやうだ。

◎事々しく君の經歷を述べるまでもない、が君は明治三十二年の東大出で、今の篠田李王職次官や、死んだ三島太郎君や、鮮銀前理事木村雄次君等の同期である、學窓を出で大藏省に入り、そこで目賀田男に認められて渡韓、財務官吏として朝鮮に留まつたのである、大藏省時代から論客の評あり、在官時代も君の鋭鋒に向つては太刀打ちの出來る者はなかつたらしい而して眞向微塵に對者に向つて行く、これが官界にアンチ鈴木熱を昂めたのであり、又鮮銀に入つても、その調子は多く變らぬので、同僚や部下の反感を招ゐてゐるのらしい。

◎君は慥に好い頭腦をもつてゐる、それで大抵なものは馬鹿に見ゆるのだらう、君に近接した某官人は鈴木君をあつかいにくい驕兒と評してゐた、君としては今少しその好い頭腦をぼかし淸濁併呑的によく人言を聞く事になればその周圍の惡評も改まるであらう、唯君ももう五十と言へば、その性格の變化を望むとは望むものの無理かも知れぬ、つまり惡評に包まれ乍らも特色ある人物として終つて行くのであらう。

◎韓一銀行の某重役は言つた、鈴木さんは威張るし、怖い人だがエライ人ですよ、故寺內さんの總督時代伯の前では石塚、荒井、大屋池田、と云つた長官連もビク〳〵もので碌に口も利けなんだ、然し若い好男子の鈴木さんのみは全然友達のやうに伯と平氣で談笑してゐるのをよく見ました云々と、頑固な寺內伯又その次の長谷川總督も鈴木君には一目置ゐてゐたらしい、屢々二老總督の決意をくつがへした事はあつたやうだ。

◎鮮銀重役としては、入行以來內部整理の準備に忙殺され、漸く成案を得てその新局面開展に向つて進み出した、然し鮮銀に於ける君の生命が長いか短いかは、色々の點から考へて俄に斷じがたい、少なくも君の頭上は晴れては居ない低氣壓は濃厚だ、雨雲の去來は之れを今後に徵しやう。

京城雜筆

古帽の記

殖産銀行秘書役　守屋德夫

何れか秋に逢はで果つべき』と千古の名句を殘して去れり。吾人はこの祇王の感懷に無限の共鳴を惜まず、五月の末より六月の初めにかけ新らしき夏帽子の流行を見るしかし幾何ならずして余の三年前の夏帽子と相接近したる色彩を呈せざるもの幾何ありや、要は唯一ヶ月位の問題なるべし、しかも御念の入つた連中はこれを洗濯せしめて自己の新らしきを持續せしめんとす、誠に暑苦しき話ならずや銀座の片偶にブラジを振ふ職業も今は漸く田舍へと傳波し、京城にも亦侵入し來らんとす、誠に意味のわからぬ現象といふべし。この手合夏帽子の白きを欲するも、多帽子のやけたるを知らず、甚だしきは七八年の骨董品を被りて得意なるものあり矛盾甚だしといふべし、夏帽子の三年目位は未だ上等の方といふべし、況んや古びたりとて僕のは東京は丸善の特選品也そこら近所の安物品とは段違なるに於てをや、決議又何かあらん、かく思ふに清浦首相ならねど光風霽月の感うたゝ禁ずる能はず。

◇更に意を强うすに足る一事實あり、一日給仕を走らして本店各課の夏帽子調査を行はしむるに左の成績を得たり、則ち吾人と共に古夏帽子を戴くもの合計九人也。內譯左の如し。

重役室、證券課、人事課、檢査課、密査課、原簿係、營繕課、產業金融課、公共金融課等は何れも當世ハイカラ黨にして、夏帽子は毎年新らしきものを用ふべしといふ迷信を有する世界の如く貯蓄課に二箇、庶務課に二箇、計算課に一箇、經理課に一箇、調査課に二箇といふ珍品を發見し、

一層目立つも不思議也。しかし吾輩とても帽子の古きを知らざるにはあらず、殊に妻などは始めより改良論者なりしに於てをや。しかし古きが故に代へよとは受取れぬ話なり、夏帽子は一年限りたるべしとか、毎年新しきを被るべきものとか、法令にても定められぬ以上理窟の通らぬ問題に相違なし。

◇或は言ふ殖產銀行の秘書役ともあらうものが……とかうなれば一層反對の氣勢を高めざるを得ず、秘書役は店頭の裝飾人形にはあらず、客接待はすれども姿や形はもとより必須的秘書役條件にはあらず、帽子を被らねばともかく形態端然として完備するに於いて何ぞ禮を失せんや、餘計なお世話と言ふべし。

◇しかしかゝる決議をつき付けられたる以來、何となく氣持ら惡しく引け氣味なるは事實也。或は電車に或はホテルに、或はゴルフ倶樂部に顏を出したる際、殊に甚だしきを覺ゆ、自ら自己の勇氣の尠なきに歎息すること屢々也、事茲に至りては何か自ら慰むるところなかるべからず、即ち內思惟の力により、外同類の多少を計量することが刻下の急務となれり。

◇抑も平家全盛の頃、清盛公天下の美妓を擁して歡樂の盃に醉ひけるが、偶ま祇王と佛と其の寵を爭ひたるは皆人の知るところ也、祇王清盛に振られての歸りがけに『

京城雜筆

欣喜雀躍す、居は心を移すとかや貯蓄課とか經理課とか計算課とかには時流に超然たる人材の蟠居するを認めて聊か快心に堪へざるものあり。

◇試にパーセンテイジに見るに、本店行員五月一日現在二二五人に對しては四パーセントに當り、甚だ以つて貧弱を感ずれども、假りに本支店行員の四パーセントが古帽子を被るものとすれば、約四十人に達すべく、一箇壹圓五拾錢と計算せば總額六十圓の節約となるを知らざるべからず、況んや勤儉節約の趣旨を體得し、八百の行員何れも古帽子にて滿足したりとせば一ヶ年壹千貳百圓を節約し得べく、二ヶ年にして貳千四百圓、三ヶ年にして參千六百圓を節約し得べし、誠に一箇の夏帽子なり一寸辛捧してこれ丈の金を作り得べくんば、行友會の基金に繰入れて、疾病になやめる同僚を救濟して見たき氣持もせざるにあらず。況んや日本國民一致して二ヶ年間古き夏帽子を被るものとせば、其の金額果して幾何ぞや。ハイカラ黨の三省を促す所以又自ら數字に於て明かなるものあるを知るべし焉。

◇つらつら惟みるに雨具帽子の類は元來一年以上の使用に堪へぬ樣作らるゝものゝ如し。今春頭取に隨行して東上の途次車中花井卓藏氏あり、傘の新案特許につき面白き講話を拜聽したるを記憶す、元來傘は竹に紙を張りたるもの故一見破れ易き樣なれども、最も肝要にして、しかも破れ易きは頭部の轆轤とす、この轆轤と竹をつなぐに糸を以てするは皆人の知るところ也、しかもこの糸を以てするところに傘販賣業者の生活を保證する契起の存するを覩得せざるべからず、糸の切れ目が即ち傘屋の命のつなぎ目也、糸に代ふるに針金を以てしては傘の需要頓に減ずと知らざるべからず、これ針金を以て堅牢に作られたる特許傘のすたれたる所以にして、こはむしろ傘屋の智慧の足らざりしところ、日米交渉ならねどグレープコンセクエンスの起來すべきを知らざりしなり。按ずるに夏帽子も亦此類也パナマの上等ならばいざ知らず、そこらの安物麥藁帽子は日に燒ける樣に出來居り、リボンは變色するに定まりたる品物なり、ハイカラ黨は知らず識らず帽子屋の營業政策に乘ぜられつゝあるを知らずや。世上かくして人心の弱點に乘じ自己の生活を營むもの尠からず豈女の流行をのみ笑はんや。

◇この稿漸く成らんとする時、三階より今井人事課長天降り給ひ宣うらく、『馬鹿ナそんなことはよく言ふ女郎買ひのすりきれ草履テもんサ』とすましたもの也。よい哉、この言、吾人又この上獸言を弄する勇氣なし即ち筆をとゞむ。

（六月十二日）

編輯室漫記

平田久雄

○河内山火災社長、俳句は堂に入つて居るとの評がある但し獨りでこそ〳〵樂むなざア甚だ人が善くない。

○森殖銀理事原稿を頼むと、僕ア内輪も同然だ、櫻井さんに頼むが宜い……ナントうまいことをいふ。二ノ句がつげない。

○鎭南浦の西崎氏、來るたびに談じ込んで原稿を書かせる、折角有賀さんと碁を打たうと思つてるのに……とボヤキ〳〵それでも何か書いてくれる。

○山口太兵衞翁の几帳面には、敬服もし、係り記者は弱つても居る、人名、時日、場所、事柄、念の上にも念を入れる、だから『京城昔ばなし』は、三度も四度も稿を更へる、談者も筆者も汗みどろだ、翁の律氣の性格が思ひやられる。

○三井の住井さんは愉快な人だ、記者の顏を見るなり『ヤー遣つて來たね、たび〳〵どうも濟まぬ、が今度もどうも忙しい、九月號には間違はぬ、ウン九月號には間違はぬ』斯うサッパリ出られては攻めやうがない。

臨江亭漫筆

樂堂　西崎鶴太郎

臨江亭の朝夕に、何事も忘れて心貧しくもなく暮らして居る事は、他人から見れば、誠に可笑しなものであらう、しかし自分はこれで澤山だ。

ぐるりみな青蔦からむ阿屋に
何にも思はで月の出を待つ

蔦は石垣にも塀にも一杯に茂つて居る。臨江亭は、周圍の壁も、屋根の上も、青蔦に埋められて居る月は低い市街の向ふの、圓らかな旭が丘から、或は白い長江に、繪の樣に浮んで居る、飛燕島の菩提樹の頂きから、夜毎〳〵に少し宛の位置をかへて昇つて來る。今宵は何の邊から出るかと、籐椅子にもたれながら、紅い灯の街を見るともなしに、打ち眺めて月の出を待つ間は、自分の胸には、名譽も利慾も過去のことも、來世のことも、なく、煩はしい影は微塵も射さぬ。

◇

臨江亭の生命は、鶯囀の咲き初むる頃から、蔦の紅葉する時までである。その間には、いろ〳〵の樹木も、水々しい芽を出して呉れる紫苑や荻も亂れ咲く。ところ〳〵に配置した石の上に、折り〳〵の花も置かれて、庭隅の龍が、小いながらも仙境を想はせる。菊枯れ蔦落つる頃には、背後の丘の柿果も採り盡くされて、硝子戸越しに流氷を眺むる樣になる。蔦の殘骸にからみ著かれて居る臨江亭は、來客からも家人からも、自然に忘られて、來年の春迄は甦らぬ。

◇

夏の臨江亭は、決して自分一人が靜かに物を思ひ月を見るの場所ではない、來客の爲めの應接室ともなり、家族の團欒場ともなる。月明の夜、遠くの黑い山を眺め、長江に漾ふ金波銀波に對して、こんな所に數日を過ごしたいと言つた禪僧もあつた。家族の誰れ彼れも集ひ來りて、飽くなき涼風を浴びつゝ、ありし日の旅の話や、其處此處に居る親戚の者の噂などし合つて、樂しい一夜を過す事は屢々である。こうして誰からも愛でられて居る臨江亭は、今が一番良い時である、木々の青葉も四邊の花も、虫の聲も遠くの山や水も、空の月も星も、何一つとして臨江亭に風趣を添へるために出來て居ぬものはない。自分は斯う思つて靜かな月日の下に、平凡な生活を續けて居る。

◇

臨江亭といつても、夫れは自分の雅號でもなく、又朝鮮固有の濃厚なる色彩を施した古典的の樓閣でもない。自園の一隅に設けてある小さな阿屋の事である。あり合せの桶の根板に墨戲半分に拙筆を揮ひて、彫刻せしめた一扁の額が、いつとはなしに、此の阿屋を臨江亭として仕舞つた。

◇

自分の庭は、素より誇るには足らぬが、大同江の流れと黃海道の連峰とを、後側から望み得る高地に在ることは、多少は自慢してもよいかも知れぬ。居ながらにして、朝夕天地の自然に親しみ、四季折り〳〵の月雪花に、敢て風懷をやるといふ程ではないが、下手な腰折れでも、詠んで見たいと、無念無想の境地に彷徨する時など、如何にも、のんびりした氣持になつて、泌み〳〵と活ける者の幸福を感ずる。

◇

自分は決して大厦高樓、金殿玉樓に住みたいとは思はぬ、又酒池肉林の歡樂境に自我を沒入せしめんとも欲せぬ、限りなき人間の慾望に憧憬れて、二六時中、不平不滿の裡に暮らすよりも、諦らめ主義だと、謗る人もあるかも知れぬが日常ありのまゝの生活の中に、出來る丈け幸福を求めて滿足しやうと努めて居る。

◇

京城雜筆

◇岸さんの事

吉田莊一

鮮銀の岸さんニヤ〳〵笑つて曰くサ、僕を飜譯書の排擊者のやうに書いてあつたがアレは間違ですヨ學術的な書物を原書に依つて讀むといふことは却々骨の折れることで、それよりか寧ろ信用ある學者の飜譯書を讀む方がどれほど能率的だか解らぬ、僕も學校を出た當座或る新聞社につとめ二三年飜譯を專門にやつたが、それア實に厄介でしたヨ▲岸さん亦たニヤリとして僕の酒のことも書いてあつたが、あれアまあ異議を申立てますまい▲そして亦たニヤリ▲實に愉快な人だ。

發達して株式會社の前身となつた

讀書餘錄

會社辯を讀む

京城信託株式會社　中村巖

株式會社の發達は歴史上極く新らしい出來事であつて、今日の大勢力を築いたのは僅かに過去五六十年の間にある。アダム、スミスが一七七六年に其著『國富論』の中に、

『外國貿易に從事する株式會社が私的結社の同業者と競爭して其の地位を保ち得るもの少なく僅かに政府より獨占の特許を受けたる場合に於て成功し得るに過ぎない。時には此の特許を受け乍ら尙ほ且つ失敗するものもある』

と言つて居るが以て當時の株式會社の不振を窺知することが出來る。進んで彼れの歿後、彼自らが唱道したる經濟上の自由主義と相俟つて彼の蒸氣、電氣の發明があり延いて產業上に大革命が起つて企業の規模は著しく大となり英のマーシャル、獨逸のシュモラーをして

『株式會社發達の大勢は總ての商業及工業に適用せらるゝこととなつて、將來恐らくは此の制度が總ての大經營に於ける唯一の經營法となるだらう』

と看破せしめた。然り廿世紀は實に株式會社萬能の時代となつて、吾々の消費する衣食住の材料は大抵何れかの株式會社の供給する所となり、吾人の知己友人は大抵は何れかの會社員であり或は株主である。今吾々の生活から株式會社を引去つたら世は全く暗闇とならう。翻つて我國の株式會社の制度は勿論日本固有の制度に非ずして維新後外國から輸入したものである。幕末時代に例の三井組、小野組などといふ社團的形態の事業が營まれて居たが之れは合名會社に類するものである。最も同業組合の制度は古くからあつて組合、若くば株仲間と稱して居た。株式會社の株式なる語も此の株仲間の會員權を代表する株式なる語を襲用したものであらう。

英國に於て制規會社がギルドから發達して株式會社の前身となつた如く日本も株仲間が株式會社を諒解する前提となつた事は疑ひを容れぬ。明治四年大藏省から出版された澁澤榮一著『會社辯』を見ると次の如く書いてある。

會社とは常例英語の『コンペニー』『コルポレーション』の摘譯なり。

『會社の大小に應じ財本の高を割り何百兩又は何千兩を以て一株と定め之を株と云ふ』

『右の株を引受くる義を申込みたる者は之を株主と言ふ』

『此の株數は幾株買求め所持するも苦しからす、若し急に金子入用の節は即日に其の株を賣るべし』

『此の法、眞實に行はれて便利なりと定まる時は、諸人の信用を得五十兩の株も六十兩の賣買となるべし』

一讀今昔の感なき能はず。

お灸のこと

南大門通二
朝鮮舍支配人　石橋滿

是非鍼灸をおやりなさいと云ふ、母もすゝめるし皆が口をそろへるので、理屈が解ればやつても可いと云つたら、理屈でお藥をおあがりになりますかとやりこめられただか私共は科學を信じそれに基礎を置いた醫術には信賴する、衆に從ふのみでなく實驗上から藥には或る程度迄の信用は置ける、だが鍼灸はどうもと更に頭をひねるとでは理屈が解ればおやりになりますかと云つて說明してくれた、それには多くの實例も無論添へてあつた。

なる程フフンと云つたのでとうとう今日迄四日間やられた、それでも腹具合も依然たりで體の倦怠も癒らない、よそうかなと思つたが今よしたら痛い目見ただけ損だと言ふので規定通り殘りの幾日かをやる事にした、それでもどうかなと思つて居る、私の頭の中では今中學時代の科學の權威?がグラリ〳〵と動いてゐる。(七、二三)

藥水のこと

李王職　今村鞆

朝鮮に藥水と云ふものがある、如何なるものが藥水であるかと云ふに泉の水であつて其湧き出づる源泉地の水を藥水と云ふ、併し泉の水はドレでも悉く藥水とは云はぬ其中で古來よりあれは藥水だと、一般より傳稱公認せられたものゝみ藥水である、藥水は其色、其味其含有物、其溫冷に關係はない、無味無臭澄明なるものもある、有臭有色有味のものもある、其の含有物に或藥効ある成分あるものも又全然無きものもあり、或ひは却て有害分（アンモニア、コロール硝酸、亞硝酸、么微有機物等）を含有せるものもある、故に廣く泉水を化學的に檢査けば、藥水の稱號あるものゝ中にも毒水があり、又其稱號なき唯の泉の中に却て藥効あるものもあり得る譯である。

が併し乍ら古來より人の澤山に集る藥水は、ラジューム、鐵、炭酸等の有効成分を含有せる者が多い鮮人は藥水を飲む習慣があるから水の良否を味感にて判別する能力は優れて居る樣である、藥水は全鮮至る所にあり、大抵一面に二三箇所以上を有せざる所はない、併し藥水の人氣は所により甚しく差異があつて、或るもの、數千人の人を吸ひ寄せるに比し、或るものは僅かに時々人影を見るのみで寥々たるに過ぎない。

どう云ふ藥水には人が多くたかりどう云ふ藥水には人が少く行くかと云ふ事を研究して見ると集る人の多少は湧出量に比例する、又其泉の附近の風景にも關係する、樹木鬱蓊として景色が好く、神秘的の臭ひがあり、夏涼しき所は大に流行るに反し、何等の風趣もなき禿山の中などには行く人が尠ない併し又其味にも關係する、忠淸北道淸安郡の炭酸水、今現に京城ホテルの主人中原氏の經營せるもの、如き別に風景の奇勝なきも其味の辛辣なるより夏は數千人の蛾集を見る、此泉には曾て李朝の世祖世宗兩王がわざ〳〵幸せられた歴史がある、房文仲の詩に左の如きものがある。

神靈釀瑞理難窮、疑是銀河一派通、香液妙凝除百病、碧流旁達活三農、靜涵物像牽秦鏡、動徹琴聲帶舜風、鳳扇參差迎織女、鸞輿迢遞降天公、湯盤正合無銘戒、堯腊何須用藥攻、百姓觀欽觀浴日、群臣舞蹈競呼嵩、自嗟無地堪容足、安得余波爲盪胸、久佩申椒還可笑、秖今三紀臥消中

鮮人は藥水の効力に付ては之れを飲用せば各種の疾病を治し又衞生强壯に資する所ありと信じて居る特に夏季三箇月間には病者非病者を問はず七八里を遠しとせず其場所に雲集する、而して各自樹蔭に憩ひ能ふ丈け多く飲用し、猶空ビンに採取して持ち歸る、或者は糧食を携帶し小屋掛けを作り、炊事して數日滯在する、或者は兼て水浴もやる、腸胃病患者の如き斷食して終日臥しては多量の水を飲む、之れは原始的素人療法なれど理屈に合つて居るから病癒へ元氣を恢復してかへる者もある。

右の如き有樣であるから、人の多く集る藥水には貸小屋が出來、雜貨屋が來り、バラック式飲食店が現はれ化粧の者が出沒し、バグチが開帳せられ、遊野郎が出沒する水浴の曲線美を觀賞するに止まらざるローマンスも發生する、社界の桎梏を脫したる一大自由鄉が、林間に展開せられて、鮮人男女が暢然として自然に親しむものであるが此別天地に對しては少し大目に見て風紀だとか衞生だとか餘り八箇間敷言はぬ事である。

つら〳〵觀すれば藥水と云ふものは、病氣保養の爲めもあれど、實は內地人が溫泉や海水浴に行くと同じ氣分で、銷夏と娛樂を兼ねて行くのが、其本志であると觀察せねばならぬ、由來朝鮮には一族的集團があつて、社會的連鎖がない從て社會的娛樂に乏しい、一時外敎に女の信者が增加したのは內房の鎖居より敎會の自由天地に解放せらるゝ、僅量の娛樂氣分にて愉快を感じた事が一の原因である事を見逃してはならぬ。

近時運動會、演劇、活動寫眞等彼等の飢渴を醫すべき、各種の社會的娛樂が增加しつゝあれど、此等は普遍性なく又僅かの新人への供給であり、又餘りに西洋、又は日本臭くシックリと民族性に嵌まらない等の欠點がある。

娛樂は强ゆべきもので無い、心から學ましむべきものである、枯木寒巖三冬花無き下層農民の無味單調なる生活に、社會性を附與する娛樂を與ふることは爲政者の考ふべき事ではあるまいか。

親族も危ぶむ、亦た宵越の借金を

私の通信經營

―回顧すれば感慨無量―

朝鮮經濟日報社長　小野久太郎

先輩永樂町人は前原登久雄君を通じて『朝鮮經濟日報社の經濟論』を執筆せよと要求された。私が經濟の才でないことは知り過ぎて居ながら之を要求するとは實に皮肉にして餘りにお人が悪い。併し先輩の要求を無下に斷るとも出來ぬので、折柄の苦熱に更に冷汗を浴び乍ら所謂『經營論』を稿する事とした、發汗淋漓實に堪え得ない。

私は下級の軍人に身を起し、誤まつて操觚界の末席を汚し素養なくして新聞記者の名刺を濫用したもので字を書く記者といふよりも頭を搔く記者の部類に屬する。從つて記者としても同業者のやうに大手を振つて出るだけの自信がなく久しく操觚界の席末を汚さぬやうに努めて來たのであるが、先年一つの衝動を受けて、夫れから私の考が急に變つて來た。私は久しく朝鮮新聞に勤めて居たのであつたが、或歳末突然免職になつた。

私は正當な主義に立脚して居たので何等臆する所なく知己先輩の許へ挨拶に廻はると豈計らんや二三の人から冷遇された。私は夫れ以來正義を曲げず職を失はず、末永く新聞記者として勤め得らるゝ途を開かんと腐心した。夫れには一つの機關を持たねばならぬことに心附いて、友人から朝鮮商況日報の發行權を讓り受けたが、之が抑も今の朝鮮經濟日報である。

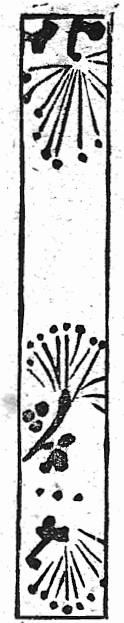
私は軍人上りの一記者であるから經營に對しては全然無理解で、如何にして經營せうかと苦心焦慮したのは勿論である、ソコで經營を知つて居る者と共に事業を始めたが、夫れにしても私が經營に盲目であつた結果は、經營上の支障が相踵いで起り、經營の行詰りを見て社員は次第に逃げ出し、逃げ出した社員の中には故意に社業を妨害したものもある。加之同格記者中には嫉妬や反感を起し退社した社員と共に我社の乘取運動まで試みた者もある。斯くの如く迫害が加はるに隨つて正義と理智の念慮が深くなつて來た。私は其の時から三男の幼兒を特に寵愛するやうになつた。三男は名を『幾萬』といふ。『敵は幾萬ありとても凡て烏合の勢なるぞ……邪は夫れ正に勝ち難し……堅き心の一徹は石に矢の立つためしあり』といふ古い軍歌から命名したのである。私は此の幾萬を撫し此の軍歌を唄ひながら、勇を鼓して經營難と闘つたが、次第に經營に對する自信が嵩じて、漸く今日に至つたのである

經營に術もなければ策もない、只社員の熱心精勵內憂外患に抗した私の勇氣と私を知る二三の人の同情に依つて今日に至つたので、私は誇るべき何物も持ち合はさぬが同人と同情者は大に喜んで呉れる同時に幾萬も幼稚園に通ふやうに成育した、朝鮮經濟日報も產後の肥立は悪かつたが操觚界の幼稚園に這入り得る位には成育したであらう。私は先天的の浪費者である宵越の金を使はぬ位の氣前なれば親族も危ぶむ、亦た宵越の借金を意とせぬほどの無賴漢である。只金策と借金の斷りが先天的に拙なのである。さればとて幼時から飽くほども精神教育を受けて居るので不義な利を射やうとする考は毫頭ない。貧すれば空腹かゝえて精神界に還り職務に熱中するやうになる。職務に熱中すると紙面も微かながら生氣を添え、貧乏三年遂に今日の紙面に成すに至つた。元來物質開發に基調する經濟日報が目先の觀察に偏せず經濟的朝鮮建設の大局觀に重きをなしたのは、貧乏したお蔭で紙面に精神が籠つた結果である。

私は經濟記者なるが故に何處までも清貧を續け、眞の朝鮮經濟を論究する日報たらしめんことを期して居る。私は主義によりて經濟日報を育てゝ行かうといふ念願であるから、其の發育は非常に遲い、創刊以來足掛五年になるがマダ充分に世間に知られず、同人は私の爲に鐵筆を唯一の伴侶として新聞界の蔭に動く無名の記者を以て甘んじて呉れて居る之れによりて朝鮮經濟日報は尙五年も經てば相當の報道機關となるであらう、其の曉に於て私は最早新聞記者として氣力を失ふかも知れぬが、私は天下の公器をお預りして居るのであるから、社內より然るべき社嗣を見出して繼承せしめねばならぬ。

私は最近私の『御用都市論』から第二版『入札通信版』なるものを案出して毎日發行して居るが既に第一版の二倍を超ゆる讀者を得て私の經營難を緩和して呉れる。必要不可缺なるものを刊行し、僅かな購讀料を集積して經營を助け、而も讀者から感謝されるほど愉快なものはなく、私は今漸く主義と經營の一致點を見出し得るやうになつたのを本懷とする。

京城雜筆



夏の景勝地？
夏の讀みものは？
この頃の涼夜は？

(一) 夏の景勝地としては、どこをお好みですか？。
(二) 夏のよみ物としては、どんな本を御覽ですか？。
(三) この頃の涼夜をいかにお過しですか？。

◇

久保田　積藏

一、夏は山も好きです、海も好きです、が今の私の身には此の個性の慾望を充たすことは當分覺束ないのです、責めて二週間でも心身の休養を計る爲め自然に親しみたいのは山々です、昨年は小供の病弱を防ぎ、自然に親しみ自由に夏を過さしむる目的で家族だけは元山に遣はしましたが海水浴場としては申分ありませんが生憎く雨が多くて閉口した樣です、本年はまだ決めて居りません

二、夏の讀物としては肩のこらぬ輕いものを選びます、主として歷史物や新しき小說物を好んで讀みます

三、まだ暑さに慣れぬのか一日の業を了へて歸りますと、幾分倦怠を覺えますが幸ひ長男が小學四年で次女が一年で話を聞いて生徒になり畫を書いて先生になり或は學友ともなつて取りとめもなく暮して居ります。

◇

深尾　道恕

一、夏は海より山が好きです、內地なら日光、朝鮮なら金剛山の山中にでも往つて臥て居たい

二、本は讀みたくなし、讀めば講談小說の類

三、涼夜なし、暑いだるいと言ひ乍らゴロ〜して居るばかりです。

◇

森　悟一

一、金剛山も知らず、日本アルプスも知らない僕としては過去の會遊地を回顧して蟾津江の流域

智異山麓の絲蕉を縫ふて今一度旅行して見たい

偶には和歌に依つて。

◇

一、家屋內の障子其他全部取りはづせる座敷より簾越しに眺むる打水の庭

二、京城雜筆、森曉紅氏著漫筆物

三、十五日迄は夜間開業、それの濟み次第京城驛前より例の支那馬車に悠々と座し、夜の奬忠壇を一周の上門前に馬をとどめ度樂み待居候事に候

◇

鎭南浦　西崎　鶴太郎

一、夏の景勝地としては金剛山の內金剛が第一と思ひます、あの山の形と清い水とはどうしても忘れることが出來ませぬ

二、夏の讀物としては輕い諢畫などに親んで居ります、釋宗演師の『臨機應變』のやうなものを見て居ります

三、夏の夜は、自庭で過すことが一番よいやうに思はれます、自分の好きな木を植え、石を置いた庭の芝生に蚊帳を吊り、世のうるさい事を忘れて、靜かに月の上るのを待つ時など、寒に快い氣持であります、會心の友でも來ればよいと思ふ時もあり、此の良夜を如何せんやと泌み〳〵思ふ事もあります。

◇

河內山　樂三

一、瀨戸內海は何處も好きです

二、短評もの、漫畫類です、小むつかしいもの、長いものは春夏秋冬を通じて好みません

三、のらり、くらりです、先夜は毒蛾にやられて二三日痒いのに閉口しました。

◇

山口　太兵衞

一、四季を通じて八方へ旅行相續け候爲めに別段何處とも申し兼ね候へ共忙中に小閑を得候際所在の海濱又は山間等その時々の心任せに山水を樂み居り候、又靜閑の湯治場は心長閑に面白く相覺え候

二、讀物は日々の新聞その外手當り次第に御座候

三、晝夜相應に忙しく候爲めに唯々俗事に逐はれ居り候、稀には同好者とザル碁を並べ候位に候ない、先づ涼しく晩餐を了へて就寢する迄に前記のやうなもの

◇

東城雜筆

智異山麓の絲蔭を縫ふて今一度旅行して見たい

二、武勇傳に限る

三、凉臺を庭に引出して向天井を極め込むに限る

◇

釜山　芥川　正

一、日本海を望む釜山

二、槃若心經

三、會見の友と時事を談ず

◇

平壤　大橋　恒藏

一、豫てより金剛山の風光に多大の憧憬を有つて居りますが、矢張り足近き牡丹臺附近から浿江の邊を夏の景勝地として大好きなのです

二、露伴、紅葉の方々が賣出した硯友社時代の作物と現今の新しい作家の小說とを比較對照して時代の推移に言ひ知れぬ感興を覺ゆる事が僕の夏の讀物として撰ぶところなのです

三、會心の友とザックバランに碎けて話して見たり、さもなき時は奥の〳〵四疊半の溫突で過ぎ越し方を偲び、獨りぼつちで不思議に顔をしかめたり將た亦ニヤリと笑つて見たりしてさうして此の頃の凉夜を過して居ます

◇

天日　常次郎

一、年中多忙の爲め景勝地らしい所は一ッも知らない、併しさういふ閑暇があつたら先づ元山へでも行かうと思ふ

二、よみ物に夏冬の區別なし、新聞雜誌の外には時々歷史物を繙く

三、つかれて歸るので格別何もしない、先づ凉しく晩餐を了へて就寢する迄に前記のやうなものを讀む

◇

坪内　孝

一、夏の景勝地としては金剛山か日本アルプスを推したいと思ひます

二、夏のよみ物としては肩のこらぬもの、而も平素は連續的の時間なき爲め首尾貫徹して讀み得ない書物がよいと存じます、本年はまだ一度しか通讀したことのない源語を今一度通讀して見たいと思つて居ります

三、レコードに依つての音樂――自分の解し易い日本物――と、偶には和歌に依つて。

◇

平壤　長谷川　義雄

一、朝鮮の金剛山を知らぬ私は、山水を語る資格がないかも知れませぬが、若い時代に約十年豐前に居住した關係上、耶馬溪が一番親しみ深い樣に思はれます。殊に新耶馬の奥よりも寧ろ羅漢寺あたりが好きです。

二、此頃は多忙に暮らして居るので、新聞雜誌の通讀以外に、落ちついて讀書する閑を得ず、遺憾に思つて居ます。

三、タマに寢轉んで、雜書を漁る。以外には、下手な碁や將棋で、氣の合つた友達と遊んで居ます。

水鄕の思ひ出

朝鮮公論社長　石森久彌

それは十二三年も前の事である。東北の山奥溫泉村の多い栗駒山の山麓に花山といふ宿場があつた。國道筋から外れて、二つの嶮はしい山を越え河原に出て、磧通ひになほも上るとその宿場に著いた。鑛山に通ふ工夫や、その山村の純朴な農夫を相手にして呉服物を商ふ私の店の小僧の監督旁々私はそこに約一年餘ぶら〳〵してゐたのである。

私の出してゐる店先をその川が流れた。白い綿をちぎつて投げたやうに水は重なり合ふては流れた。それはゾッとするやうな冷たさの水であつた。

夕方になると店先にかな〳〵蟬が鳴いた。半襟を素見に來る村の娘がよく遊びに來た。そこに頑丈な村の青年が日に焼けた顔を表はして夜の更ける迄ぶざけたりした。けれども此れ等の娘や青年達は翌朝の未明に必らず馬に跨がつて遠出として草刈に出かけた。

橋をたたく馬蹄の音を夢心地に聽くともなく聽いてゐるときまつて彼等は草刈唄を謠ふた。いい聲であつた。

そつと傍らに眠つてゐる少年の顔を窺くと彼も眼を開けてゐた。

二人は今の聲の主の歌を批評し合ふたりして夜の明けるのを待つた。花山村の水鄕のほとり、十數年經た今でも必らずあの水の色、あの强烈な山氣を包んだ山の容は變るまい。私は夏になると何時もそれを思ふ。

驛遞雜記

朝鮮總督府遞信局長　蒲原久四郎

○

人が社會的動物であることは、往昔アリストーテレスが既に喝破したところである。而して人が社會を構成し、社會的生活を營む上に於ては相互交通するを以て、交通機關なり通信機關なりと言ふものは、實に共同生活上必要缺くべからざるところの機關なのである。

○

從つて人類生活の歷史と、通信機關の歷史とは、時を同じくして展開せらるべきものであつて、當時の機關と云ふものは、今日現在するが如き完全なものではなかつたのである、けれども、兎に角、太古から通信機關たるべき意思傳達機關といふものは存在してゐたことは疑ふべからざる事實であるのである。

○

所謂意思傳達機關として最初に存在したのは、文化未だ普からざる當時のことであるから、單純なる『口頭通信』の機關であつたのである。史實に徵するに『崇神天皇十年始めて四道將軍を置き、大彥命を北陸に武淳川別命を東海に吉備津彥を西海に道主命を丹波に遣し大彥命等復命して誅道の安寧を報ずるに至り使命始めて四方に通ず』とあるから、この當時には既に口頭通信が利用せられてゐたことが解る。尤もこの時代には未だ文字が發明せられてゐなかつたのであるから、意思傳達は專ら口頭通信に依るの外無かつたのは當然である。

○

從つて、文字が渡來してからは、意思傳達の方法も自然變化して來た譯で、神武紀元千四百年代の初、即ち大化二年に至つて百般の制度が唐制に模倣せらるるや『改新の詔を宣し始めて驛馬傳馬を置き驛鈴傳符關契を作る』といふところまで進歩して來たのである。之は專ら軍事上の必要から來たものである、便宜その傍ら官用の往復にも使用したのであつた。次で文武の朝に至り『美濃國岐蘇の山道を開き始めて諸國に郵亭驛を置き以て書信を通じ且旅客の缺乏を憐み勅して粟米を路傍に置らしむ』ることになり、驛傳の費用は官給といふ定めになつたのである。之が文書通信の法制の嚆矢であると思ふ

○

其の後幾多の消長があつたが、治承四年頼朝が鎌倉に幕府を置いて驛政を改め『當時鎌倉、京都間を始めとし諸國の通信皆專ら飛脚を用ひ公用の傳馬は

め『當時鎌倉、京都間を始めとし諸國の通信皆專ら飛脚を用ひ公用の傳馬は皆其沿道の土民に課す』ることとし、路次奉行の官職を設けて驛政を掌らしめて『路次權門勢家の庄園を論せず、命じて其傳馬を騎用し』たのであつた其の他道路、驛家、渡船の管理を定め、或は西方沿道守護人に命じて夜行番を置き、又新驛を增置して往復の早馬や、將軍家の荷物送夫などを管掌せしめたりして、所謂鎌倉政治と共に驛制も亦大いに振張したのであつたが、遺憾ながら室町時代から應仁の亂の頃にかけて、この振張した制度も概ね廢滅に歸して仕舞つたのであつた。

○

然しながら群雄割據時代から郵制は再び舊の如く振興し、織田、豐臣時代に至つては驛政も亦改まつて、我が驛制上には著しい發展を來したのであつたけれども、專ら官用の送達だけであつて猶未だ一般の信書送達の方法までは備はらなかつたのであつた。

○

ところが德川幕府は、驛政には一段と力を注ぎ、常置制の驛傳脚を設けたので、諸國の領主も從つて其の采邑から江戸に往復するところの急脚といふもの置いた。がそれは未だ私信送達を爲してゐなかつた。然るに元和元年に至つて『大阪定番の諸士等東海道各驛長等と相議し始めて其家隷を以て飛脚とし毎月三度日數八日を限つて東海道を往復することにした。之が所謂『三度飛脚』であつて、實に私信送達機關の濫觴である。後世になつて之れが三都を連絡するところから『三都飛脚』とも云ふやうになつた。其の後大阪の商人達の中には飛脚を業とするものが出來たけれども、それ等は皆『其の名を大阪在藩諸士の下卒に藉り其法被を著し双刀を佩び』て形式上は民營が許されてゐなかつたのである。

○

それが寛文三年になつて『三都商賈等相議して三都往復の飛脚屋を創業す』といふことになり、大阪衞戍の保護から離れて完全な通信事業の民營が行はれることゝなつた。所謂『町飛脚』といふのが是である。而して之は其後に於て旅行日程を短縮することとして『東海道の旅行日程を以て六日と定め』た。之が『定六』といふ所以である。

○

斯の如くして德川時代に於ける飛脚の制度は非常に發達して、我が國の郵制の發展を著しく助長し、御蔭で郵制はこの時代にその大體の形體を成して仕舞つた。次で明治時代の新郵制の創始となるのであるが、茲で一先づ擱筆する。兎に角、通信の如き社會的施設は、矢張り社會人事の發達に支配され、社會の要求に應じて進展して行くものであるといふことは、以上の史實に照しても明かであらう（一三、七、一〇）。

朝鮮六景

滿鐵旅客係主任　佐藤作郎

平壤

平壤は京都に似たり。俗、京都を西京と呼ぶ。高麗の朝、平壤も亦西京と稱せり。蒲團著て寢たる姿の東山は、綠衣を裝ふ綉繡山に比すべし。彼に鴨川あり此に大同の清流あり。鴨の水京美人を產すれば、大同の水は朝鮮美人官妓を生む。京都に千年の史實あり、平壤は檀君以降四千年の歷史を有す、彼の佛閣伽藍を以て日本建築の宏を誇らば、此は朝鮮建築の粹を聚めたる大同、浮碧、練光の高閣を示さん。秀麗の山水、名勝舊蹟、よく客を惹きつくる点、又彼此共通す。只だ京都は四山環抱の盆地に在し、平壤は一望數里の平野に位す。余は京都の陰鬱なるより、明潤なる平壤の風光を愛す。

昌慶秘苑

後樂園、兼六公園、常磐公園これを日本の三公園と云ふ。孰れも林泉の美を以て著る。蓋し之等の美は美なれ共人工の美なり。高松に栗林公園あり、天然の山丘を取入れたる、頗る趣き深し。余は栗林の三公園の選に洩れたるをあやしむ。自然の風韻人工を以て現し得ざるものあればなり。更らに栗林を深邃幽潤ならしめたるものに我が昌慶秘苑あり。拘拱の松、蓊鬱たる叢裡、古泉五百年の翠苔蒸し梢頭には白鷺悠々群飛す。又樹間に點々彩する、碧瓦朱戟、艶にして然かも俗華無し。實に我が昌慶秘苑の如きは、日本一の庭園美と云ふ可き也。

扶餘

我朝に中大兄皇子あり、唐に大宗あり、新羅に武烈王あり。共に不世出の英傑たり。是等英主の、各雄を百濟に競はしめし當年の山河は、今尚ほ舊容依然、扶餘に在り扶蘇山上、晩煙模糊の中に聳ゆる大唐平百濟塔の、我等をして一種禁じ得ざる情緒を溯かしむこと何ぞ深き。水北の晴嵐、扶蘇の暮雨泉闕寺曉磬、落花岩宿鵑、九龍の落雁、白馬口沈月、窺岩の歸帆、所謂八景の情趣又掬すべく、史蹟として將又活畫圖として、朝鮮中最も優に珍たるものゝ一と言ふべきなり。曉靄、泚泗城の趾に立てば砧聲遠く又近く、座ろに古都蕭索の情油然たり。

金剛山

南宗畫趣より見て金剛山は、風景畫の一大扮本たり、海あり山あり川あり平原あり、而して山と溪の研究材料としては、内外恐らく唯一無二ならん。奥萬物相の嶙峋巖々たるは第一の條件なり。萬物相以外見るべき山少からず。盟主毘盧の頂き絶えず白雲曳きて萬物相に絶好の對照を爲す。萬二千峰萬瀑百潭、風雲雪月變化極りなく、四季の草木花鳥、各精彩を發するは皆金剛山をして一大扮本たらしむ。綠葉水光滴らんとして、紅葉は朱を刷きて山を包む勢あり、就中溫井嶺の秋色は他に匹儔無し、余、寡聞、未だ此大扮本に依り、曠生の筆力を揮つたる名畫を見ず蓋し扮本の餘りに偉大なるの故乎

慶州

朝鮮に古蹟多きが、古蹟の中の古蹟は慶州也。肇祖赫居世以來九百九十餘年間、新羅は其都城を慶州に置けり。新羅は此所に據り百濟高句麗を滅し、任那日本府を排し後百濟、泰封を亡し、半島を統一せり。慶州は實に朝鮮文化の心髓たりし所也。今、慶州に遺蹟多し曰く半月城、瞻星臺、芬皇寺、雁鴨池、堀佛、五陵其他枚擧に遑あらず。就中末王景哀と其妃、流觴曲水の宴遊中、後百濟の刄に殪れし鮑石亭の遺蹟最も哀れ深し。又郊外に佛國寺、石窟庵あり、新羅彫刻建築藝術の粹を茲に留む。蓋し慶州の平野數里は、自ら遺物陳列場たるの觀あり。

雲林

咸鏡南部線文川驛を距る五里、鎭前里の寒村あり此處より箭灘川に沿ひ登る約一里にして、頭流瀧兩山脉の峽谷に入る、溪山深邃人烟稀なり。奥に雲林瀑布懸る、瀑長四百尺と稱す。瀑腹に一釜あり、

下半二岐して落つ。即ち二釜落ち　を選せんとして、採るべきは多か　又

下半二岐して落つ。即ち二釜落ちの樣式也。碎點飛灑、常に煙霧とざす。里人傳ふ、此瀑全身を現はす時必ず變ありと。蓋し水煙絶えず濛々たれば也。

世の常、名勝には必ず因緣の伴ふ也。因緣は理窟也。理窟は風景を沒趣味ならしむ、因緣多きは涼味を減却す。特に夏季の名勝は一切因緣なきを尙ぶ。此意味に於て余は、何等因緣を有せざる雲林の風景を朝鮮一の探涼地として推す。

附記

朝鮮十三道地廣し、山に水に佳景少からず。而もここに朝鮮十二景を選せんとして、採るべきは多からず。

余、先づ、推しも推されもせぬ、朝鮮代表的の景趣、叙上六景を選び、殘六景の選擇に惑ふ。即ち、海景に馬山灣あり元山あり釜山松島あり。山姿美內に藏山、長壽山俗離山あり。三防の幽峽、朴淵の風景又た捨て難く、其他沼湖、河川、原野皆た又淨地、靈場に美景數多あれど、各一長一短、所謂ドン栗の丈け競べのみ。若し中より特に六景を選び採らんか、他より遂に偏頗の誹りあらん。風景の選採また難い哉。

夏日雜記

永樂町人

暑

鎖夏の方法は、何といつても寬濶にある。

あぐら、はだぬぎ、ねそべり、是れ第一等の手段でなければならぬ

又

元來人間は動物だ。

しかくお行儀善かる可き筈がないヘタに行儀振るが故に暑いのだ。

又

戀愛神聖論が唱へられる。

が人間は、暗い所で、動物の眞似をせねば、種族を維持することが出來ぬ。

口を拭つて、傑さうな顏を爲す勿れ。

粥

夏の朝に好いものは、茶粥だ。

茶粥には、多少の媚味と、芳氣がある。

我々のやうな胃弱者でも、食大に進むのである。

又

茶粥といへば、大分在住の當時を思ひ出す。

臨濟の僧紫山と懇意にし、屢々相往來した。

夏の朝まだき、寺を訪ふと、老松も庭砂も、昨夜の風露に、打しめり、マルで打水したやう。

淸談を聽いて居ると、茶粥が持出される。

老僧自慢の物だけに、その味今に至つて忘るゝこと出來ない。

浴

夏の夕に好いものは、浴である。

浴後籐椅子に椅つて、凉を迎へ、月を迎へ、銀河を迎ふ。この樂み夏日第一のものである。

又

浴といへば、春の晝間、櫻花の下に据風呂するも好い。

秋の夜半鐵砲風呂に浸つて、木枯時雨を聽くも好い。

が夏の浴は、風雅の沙汰でない、それは直に命の洗濯である。

又

暑苦しいものは、人間だ。

體の所有者たる自己自身さへ、いとはしくなる。

況んや兒啼き、妻瞋るに至つてはふつ〳〵娑婆の厄介を感ずる。

思ふに加藤左衞門軍氏の遯世も、仲夏八月か。

我々は彼れの心境が、かなり能く解るやうに感ぜられる。

◈世間人間記

平田久雄

深尾殖銀理事、ひま〳〵に南畫を學んで居る▲モウ我々に闌の一幅位は御下賜相成つても……と言ふと『どうして君、四君子といふものはそんな生やさしいものぢやないよ』▲二三ヶ月經つて又た蘭の話をすると『どうして君、四君子といふものは……』矢つ張りいけない▲思ふに次號には闌のうめ合せに何かの原稿が來ることゝ思ふ▲仕方がない、闌の儀はコヽ當分据置と決める▲有隣生命の山路さんは、同業者間では溫厚なる長者として推されて居るが、此の人亦た俳諧に長じ此方でも宗匠として大に持てゝ居る▲氏は殊に俳畫（揮毫）がうまく、曾て帝展でも入選したが、此の間の鮮展では第二回目の入選をした▲號は竹城といひ、庵名は有隣庵。

京城雜筆

續十有六半

京城日報社　河谷靜夫

松本さん

東京から、カラーに關する件で、あなたに宛てた片信が大分問題になりました、先月十五日の私の社の落成式に集まつた名士諸君、汗だく〳〵階上階下を馳せてる私を捉へて『どうだ十六半は？』なんて問文字を連發して困らしました地方に在る友人なんど遙かに手書を寄せて揶揄ふ者もあります、殊に恐縮して居るのは、大宮人篠田さんが、あれを材料にして本誌前號に、其翌日書めしを友人と帝國ホテルに攝りました、食後構内のミカド賣店を見ました偶々洋服附屬品の陳列してある所にブツつかりましたので直に『カラーの十六半は？』二度の手數を省くためにカラーとサイズとを一息に尋ねました、棚をくまなく探した痩せた先生曰く『十七ならあります』驚かざるを得んやであります。

『駄目だらう、十六半でなくちや駄目だらう』と私が本統に困つて居ましたら横に居る友人、『可いだらう試みに十七をつけて見給へ』といつて移轉工事に加勢する、不思議なるかな其の十七、毫も太くない、些の餘裕だにない、ピツタリ合つてる、『旨い〳〵、これを半打呉れ給へ』『二ツしかありません』『いくら』『一ツ七十五錢』『有り難い』と禮をいつて授受をすましました、恐らく一ツ一圓五十錢でも異議なく買つたものと思ひます。『どうしたんだらう此十七は少さいんだらうか』と云ふ大公案に逢著した私は查覈究明遂に一大眞理を發見致しました。

◇

松本さん

私は十六半のカラーを此十年間程引續いて用ゐて居ります、然るに日進月歩？の私の肉塊は現在に於て到底十六半を維持すべからざる事になつて居たのでした。尠くとも五六年前に於て昇格すべき運命にあつたものです、洋服を著れば苦しいものと思つたのは實はカラを著れば苦しいものであつたのでした、歸城して宅にある十六半を著けて見ました皆頗る小さい偶には前方ボタンの上から皮を少々挾み出す樣なものもあつて殆んど用ゆべくもない、道理でどうも今迄私のカラーの汚れが馬鹿に早いと思ひました、夏なんど寧ろ十七半位がよいのではないかと悟りました。

正に吃驚すべき一大發見ではありませんか、私は此大發見に心から欣快を覺えますと同時にこれから先のカラーの用意に甚大の注意を拂はねばならぬと云ふ自覺を得ました、實に一大發見と云ふべきだと思ひます。

◇

松本さん

あなたに宛てたあの便りは五月の二十三日に書いたものです、然るに、其翌日書めしを友人と帝國ホテルに攝りました、食後構内のミカド賣店を見ました偶々洋服附屬品の陳列してある所にブツつかりましたので直に『カラーの十六半は？』二度の手數を省くためにカラーとサイズとを一息に尋ねました、棚をくまなく探した痩せた先生曰く『十七ならあります』驚かざるを得んやであります。

『駄目だらう、十六半でなくちや駄目だらう』と私が本統に困つて居ましたら横に居る友人、『可いだらう試みに十七をつけて見給へ

働きの自然

京城本町署長　鈴木兵作

抑も『働』といふ字は『勉めて事をなす』『骨折り事を行ふ』『動作する』『動きて用をなす』といふ深甚の意味が今著されてある、即ち『働きの自然』は陽春に花咲き、嚴冬に雪降る樣なもので、無理や、不適度や、過度や、不足や不健全や、盲目的や、賣名的や、惡意や其の他不眞面目の働きを云ふものではない、飽く迄眞面目で自然でなければならぬ。

見よ宇宙萬有悉く自然に向つて働いて居るではないか、太陽を見よ月を見よ、地球を見よ、其の他風の動けるも、水の流るゝも、雲の集るも、霧の散ずるも、海にも陸にも草木にも皆『働きの自然』に向つて働いて居ないものはない。若し夫れ働きに自然なくば太陽に光を失ひ、月に清き影を失ひ、地球に四季晝夜を失ひ、風は吹かず水は腐敗す、自然に働けばこそ之

だらう試みに十七をつけて見給へ　自然でなければならぬ。　水は腐敗す、自然に働けばこそ之

京城雜筆

等の萬有は其の本能と眞價を發輝せらるゝのである。

人類も『働きの自然』に向つて働くといふ事は當然の事で、それは人生の目的であり亦務めである、其の務めに能く勵み能く『働く』人は發展して榮へ行くも、怠る者『働』かぬ者は墮落し衰へ行く、之れは天地の法則であり『働きの自然』の道理である。人と人との競爭、國と國との競爭も又復此の『働』きの如何に由る『働』きの優れる者は強くして勝ち『働』きの劣れる者は弱くして敗る。此等は皆其の人民が個人として國民として『働』くと否とに依つて隆替興廢が分れるである。勤勉にして忠愛奮勵活動の國民ありて其の國の衰へ亡ぶるが如きは古今未だ曾てないことである。

現代の如き生存競爭激烈場裡に立つ以上、誰れでも全力を注ぎ其の頭と腕とを以て『憂き事の尙此上に積れかし限りある身の力ためさん』といふ大なる勇氣と覺悟とを以て働かねばならぬ。之を働けば其の個人が成功發達するばかりでなく、個人の發達した其の社會は健全となり其の國家は富强となりて國の光が輝くのである。

近時國民の思潮は漸く驕り動もすれば奢侈に流れ、安逸を偸み甚だしきは統制を失ひ、時に放縱詭激に赴かんとする風さへ見ゆるは識者の深く憂ふる處である。我民族千年『働』きの歴史に依り醸成せられ鍛錬せられたる貴重なる國民精神が時々雲の如く通過する思潮に蔽はれ毀たるゝ如き事があつてはならぬ。

吾々は深く自覺反省して常に自分は國體の一ツの支柱であつて自己の一擧手一投足は直ちに社會國家の消長盛衰に影響する事を思ひ、純白公正、至誠質實事に當り天下の公道を濶步し、熱誠以て眞面目に『働き』眞個の日本國民として其の特色を發揮すべき所は之を發揮し、世界の民と共にすべき所は之を共にし、以て人格の發展、文化の進步、國運の隆昌に努めねばならぬ。

近時京城に於ける內地人青年諸君は大いに自覺する處あり自ら進んで青年會を組織し穩健なる團體の續出を見るに至りしは社會國家の爲め慶賀すべき事であると思ふ。切に之等團體が『働きの自然』に向つて活動し成功の美果を收めんことを望むものである。

玩具と朝鮮の子供

明治町玩具卸商　川井昌一

◇朝鮮人の間に玩具の賣買が行はれたのは、私の考へでは日韓併合以後の事だと思ふ。無論朝鮮の子供だとて可なり古くから玩具を所有してはゐたが、それは家庭で拵へてやつたものに過ぎないらしいのです。――あの竹馬ですね、李朝以前の朝鮮の繪にも小兒が竹馬に乘つてゐる圖がある。然し私の斷片的に推斷する所によると、支那の繪をその儘受け入れて繪にだけ書いたものであつて、竹馬は朝鮮にはなかつたらしく思はれる。此邊は特に學者の示教を俟ちたい

◇現在の商況ですか。現在では玩具は獨り都會ばかりでなく、殆ど朝鮮の山村僻隅にまで及んでゐるので、朝鮮の子供たちも惠まれて來たわけです。玩具を賣つて步く行商人としては、市場廻りの商人があつて彼等の足跡は如何なる僻邑にも及ぶのですが、彼等は農繁期になるに先だち其方の仕事にかゝる有樣なので、開城以南は四月八日を、以北は五月五日を釋尊降誕祭として、春の行樂日の最終とし、それまでは玩具も賣行が比較的盛んで、それからは農繁期として一寸閑散になるわけです。――聊か岐路に入りますが、宗教上のお祭りなどは季候のいゝ時でないといけませんが、――殊に朝鮮のやうな寒國では、十二月や一月では如何に釋尊の有難い誕生日だとて一日遊樂してお祭り騷ぎをやるわけには行きませんが――お釋迦樣はいゝ時にお生れなすつた。

◇亦た內鮮人を通じて子供に最も歡迎されるものに自動車のおもちやがある。おかしなことには自動車だと子供は幾つでも欲しがる。『自動車は家に三つもあるから今度は自轉車を買ひませうね』なんかと云つても子供は承知しない。之は親の淺はかな智識と申すべきもので、同じ自動車でも夫れ〳〵出來具合の違つてゐることを子供はよく承知してゐるのである。子供の神經は中々微妙に敏感に出來てゐるものである。

硯

―硯の鑑定、その保存―

京城婦人病院長　工藤武城

先づ冷水で硯を丁寧に洗ふ。

溫湯は禁物である。硯庭、即ち墨を磨る面の墨滓を盡く去つて、濕氣を拭去らずに其儘直射光線に曝して、斜に之を眺める。濕氣が無くなつたら又冷水で其面を濕す。良硯であれば必ず何等かの班紋が隱々として出沒する。硯を動かしても消へぬ紋理と、其位置に因つて隱現するのと二種ある。恰も日本刀の『匂』と『錵』との關係の如きものである。此紋理が全然顯はれなければ先づ硯としての價値は無い。初の間に此種の物には手を附けない方が善い。

次に天然石であるか、人工に因て形狀を作られたかを見る。此は如何なる素人にも分る。石の表皮が現はれて居るからである。前者は端溪に多く　後者は歙州に多い。

第三には刀法を見る。彫工の刀法に因つて時代が分る。唐、宋、元明、清と各時代に依つて特有の手法と刀法がある。此は實地に研究せねば分らぬ。

第四には之を平手で叩いて見る。暫く叩いて居ると、良品であれば之でも鑛物か知らんと思ふ程軟かい感じがする。恰かも葛覇の固くなつたか、護謨板を叩く樣な氣持である。叩いて手が痛いやうだと先づ見込が無い。

第五には二本の指で硯を宙にぶら下けて火箸の樣な物で叩いて見る。其音響でも鑑別がつくが、筆で說明は六かしい。

第六には表面の手當りを見る。手掌で撫でるか頰摺をすると、良硯であれば所謂玉肌膩理、溫潤美女の肌の如しと云ふ感じがある。手掌で强く磨すると垢が糸の樣にころ〳〵と出る。此は硯面の鋒鋩が鋭ければ鋭い程澤山出る、歙州だと垢糸が大に、端溪だと細い。全然垢が出なければ鋒鋩が無い、換言すれば硯としての生命が無い。

第七には潤と渴とを試みる。庭面に呼氣を吹かける。水滴を結へば潤であり、露を結ばなければ渴して居るのであるが、此潤は餘り當にならん、赤間の紫金石や海州の青石等も能く水滴を結ぶけれども撥墨は非常に悪い。

第八が主眼の撥墨である。少しも力を入れず、靜かに磨する。良硯であれば音たゝず、泡たゝず、二度も往來すれば手紙位書ける程濃くなる。淡墨として用ひても奇麗な墨色を現はす。其墨當りが、恰かも親友が久振に遇ふて握手する如き感である。熱したる鍋に蠟燭を磨するが如き手當りがする。支那人は之を形容して鏊盤塌蠟とも或は熱爺塗蠟とも稱するが、誠に其通りである。悪硯であるとがさ〳〵音がする。泡沫を生ずる。墨當に少しも親みがない。大官や重役が新聞記者に門前拂を喰はす樣な心持である。硯と墨とが互に相拒絶して、手腕部や肩胛に非常に嫌な響を與へて、中々濃くならない。此は一度比較すると僅かな等級の差でも直に分るものである。

第九に眼の鑑別をする。眼の良品は白羊糞の如き瞳を中心として五六輪の種々の色の紋輪を現はす鸜鵒眼を始めとして三四十種あるが實地に見なければ分るものでないから略する。

之れで一通りの鑑別法を述べたから保存法に就て一言する。

硯は使つたら直に洗つて置かねばならぬ。洗ふには糸瓜か蓮の實の毫に限る。切地も紙もいけない。宿墨は最も禁物である。墨色が全然出なくなり、鋒鋩が退いて了ふ。墨の中の膠が腐敗する際に一種の酸を生ずるから、大事な硯面を侵蝕して粗糙にする。庭面は刀の刄の如きものであるから一點の瑕疵も許さぬ。月に一回は剃刀砥の合せ砥（即ち名倉石）で磨してやる。手で直接に面に觸れてはいけない。皮膚の脂肪の爲に非常に撥墨を損する。衡鉾も三日顔は洗はずとも硯は毎日洗へと敎へて居る。

次に支那朝廷硯鑑定官たりし高因齋の後昆を戒めたる一絶を添へて置く。

石工欺汝只鐵毫。翳翠朱砂揔未高。鸜鵒眼多堪抵鵲。梅花坑好可磨刀。

◈釜山港から

永見京造

拜啓、いよ〳〵御多祥奉賀候、京城雜筆とり〳〵面白く拜見仕候、小子朝鮮をめぐり〳〵て再び釜山の客と相成り申候（七月九日）。

梅雨晴れや對州の山雲の如

別も出て仕事も面白かつたと同時

京城雜筆

大漢門前に立ちて

―亡き京日の舊屋を弔ふ―

殖産銀行調査役　中島司

或る朝太平町を通り、あの大漢門前の廣場の一角に、曾ては堂々と羽翼を張り、南山の蒼翠に正面して、威容を誇つて居た京城日報の宏壯な灰色の建物が、跡形もなく取り毀たれ、もとの敷地の後方に寧ろ瀟洒な赤煉瓦建ての新社屋が裝を凝らして居るのを見た時、私は思はず歩を停めて、暫し感慨に打たれたことであつた。京城日報社が從來の角屋敷を京城府に讓り渡して別に新築するとの話は聞いて居たが、それが實現された代謝の光景に接したのは此時が初めてであつた。素より此の變遷は京城日報のために一の進化であり發展である意味に於て賀すべく喜ぶべきことであらう。さりながら、七年以前まで京城日報の一記者であり、太平町の賃屋の建つた最初から其處を本陣として、文章報國の事業に對し一石を積み重ぬべく勞苦したる經歴を有する私にとりては、あの歴史ある（假令年月は長からずとも）建物が、一朝にして消えてなくなつたのは、何程か殘り惜しく思はれぬでもない。否、その斷礎廢瓦の邊りに低徊佇立し悵然として有爲轉變の思を禁じ能はぬのである。太平町の大通を過ぐる時、私は未だ曾て彼の建物を懐かしく仰がないことはなかつた。實際私にとりては、それが私の新聞記者時代について豐かなる回想の對象であつた。今はその對象を失つて、私の京日時代の過去が、何だか急に遠退いてしまつたやうな心地がする。

× × ×

大正三年の二月東京の日本倶樂部で、蘇峰德富先生から送別の御餞走を受けて、生れて最初の海峽を渡り、京城操觚の人となり、同六年の九月蘇峯先生から『爲誰勞苦爲誰瞋、花落花開五十春、睡覺閑窓無一事、青山笑對白頭人』の一絶の揮毫を頂戴して、同僚山崎珂水君と共に社を退くまで足かけ四年の歳月は、寧ろ短かしとすべきが、しかも私には大切な期間であつた。その理由はいろいろある。が、就中私のためにそれが人生の苦味を含んだ生活の第一階梯であつたことを最大の理由に數へたい。京城に來るまで六年ばかり東京で新聞に奉公した。學校を出てすぐの事だつたから、まだ世間も知らず人情にも疎く、二十代のやんちや盛り、獨身でもあり、家父も在世中であつた。從て東京時代は未だ本當の苦勞は少なく、書生氣質で新聞に勤めて居たやうなものであつた。併し京城に來た時には丁度三十歳で、すでに妻子もあり、間もなく父も逝き、病弟もわが手で養はねばならなかつた。子供も一人殖えた一方には記者生活に分別も出て仕事も面白かつたと同時に、相當に生活の苦味も嘗めた。

× × ×

今日の京日社は財政も豐かであるさうだが、大正三四年頃は可なり内輪が苦しかつたらしく、私共は往々にして其月の給料を翌月に頂戴した位であつた。それでも別に不平も出さず、新聞記者といふものは貧乏なものだと納まり返つて悠々と職を樂しんだ。こわもてをいゝ氣にしてさもしい心も起すことなく、一通りの體面を維持したものだ。思ひ出せば當時の事、之を筆にすると限りもない。夫から夫と記憶が蘇つて來る。そのうちに書いて見やうと思ふ。今はただ亡き京日の社屋を偲び之を弔ふの心のみを表したい。葬式過ぎての弔詞のやうではあるが（七月十五日夜）

◈水谷氏の事

吉田莊一

古河鑛業の水谷さん、マダ歳のわかい人だが、歴史研究に格別の興味を有つて居る▲荒木又右衛門伊賀越の仇討では、三十六名を叩き斬つたと謳はれて居るが、アレは三名を斬つたに過ぎぬ▲堀部安兵衛高田馬場は六七人斬つたことになつて居るが、コレもわづか二名を斬つただけ▲大石良雄が山科の隠棲を出で江戸に下る時、彼れは惡性の黴毒に惱んだ、彼れは彼れ自身の肉體に就いて、絶望的なやみがあつた▲一體、大石の遊蕩は、決して佯狂的なものでなく、本質的なものだ▲芝居でお輕といはれて居る女は……斯うして水谷さんの史談は、滾々として盡きぬ

京城雜筆

子供に恥づ

奉天　廣江澤次郎

金儲の話といへば實業家の腦神經は即刻非常な馬力でモーションを始めるが、扨て操觚者側から何か書けとでも言はるゝと奇體に細胞は萎縮し頭腦は鉛重を加へる。若し夫れ誤つて？承知したと口走らしたが最後、日本國中の借金を一人で背負つた程の苦痛を日々感ずる。原稿用紙の二三十枚も駄目にするがモノにならない締切間際には記者君容赦なく原稿を督促に來る、本人玆許頭痛鉢巻の體丁度大晦日に直面して居る樣な狼狽振り絶對絶命訪問客を斷り罪なき女子供を吒り飛して遠ざけ一室に立籠り縣命の努力、苦心の力作は旬日を出でず立派に活字に組まれて世間に現はれる、名文？は意氣揚々故卿に錦と許りに里歸りと來る、此時の愉快は又格別過去數日間の苦心慘憺は忘れてホット息をつく家内中引つ張り合つて讀む、仲々の名作！母や妻の顏は若干悅びと誇りに輝く、小供同志『お父さんは存外ウマイねー』と囁く、存外とは何事かと吒る筈だが此の場合大目に見て置く、友人は『イヤー遣つたね、實際家の意見は傾聽に價する』等と煽てる。

私の過去の體驗より言ふも相當熟練する迄筆に對しては此の邊が當代實業家共通の弱點であり僞らざる一般の心理狀態であると思ふ。一日に十通や二十通手紙の書ける手腕と頭腦を持ち、算盤一挺あれば天下何のそのゝ氣魄に富む實業家が此醜狀は何たる事だろうか。

× × ×

日本の政治が跛足的進歩よりせず隨つて日本の財界が常に安定を缺ぎ動搖限りなきも、此實際家の退嬰因循姑息（或は無筆？）に胚胎して居るものと云ふも過言ではあるまい、勇を皷して正々堂々意見を發表し施政の參考に資し社會にも實狀を知らしめ進むべき路、採るべき策を互に協力研究すべきであると思ふ。

永樂町人が京城雜筆社を創立し此方面の缺陷補足に、著手された事は近來の快事であり、非常に有意義な事業と思ふ。時は維れ護憲三派聯立の憲政史上特筆大書す可き名内閣が七千萬同胞の期待に副ふべく渾身の勇を揮ふて活動し吳れる秋である、實業家も陣容一新奮勵努力せねばなるまい。

× × ×

書く事も天下を動かすが如き大論文は別とし所感を新聞雜誌に時折投稿する程度ならば左程困難でない樣に思ふ。私の二男坊は正克と申し日の出尋常小學校の四年生である。

議會の新人中野正剛さんが朝日新聞京城特派員として健筆を揮はれた當時、雪嶺博士の愛孃民子さんとの間に玉の如き一男を擧げ克明と命名された、一ヶ月程經て私の二男坊が產れた中野さんは自分の正と克明さんの克をとりて正克と命名し夫れから間もなく倫敦留學の途に上られた。

春風秋雨玆に十星霜正克も數へ歳十一となり旅行がちの私に家信を傳へる、先日學校で作文に御褒美を貰へたと云ふて奉天の私に寄せたのが左の一文である尋常四年の小供ですら幼稚ながら自分の感想を四五十分の間に文字に現はす、然るに大人は冒頭の如く大苦痛を感ずるのは恥しいと思ふ。

風呂の中で　廣江正克

昨日僕は兄さんと風呂へ入つた。

『兄さん今日の火事はひどかつたね』

『うんひどかつた』

『何軒ほどやけたかね』

『そう二三軒ほどだ』

『そうしたら大きなたて物でしよう』

『そうだ鍾路二丁目の活動寫眞館とそこらのうらの方だ』

『兄さんはどこから見た』

『フランス教會からだ』

『そうね僕は山から望遠鏡で見たら柱がやけてたよ』

『そうか』

『兄さん今日の火事面白かつたこわかつた、それともかあいそうだつた』

『兄さんはそんな事でない勇ましかつた消防ポンプがうなつていくのは實にいさましかつた』

『僕はただやけている所を見たのでかわいそうだつたよ』

『兄さん出ようか』僕は急に出る事をいつた、するとお母さんが『まだ出ないか』と言ひましたすると兄さんが『今出ます』といつた（原文の儘）

甚六の長男は蒸氣ポンプの活動を勇壯と賞し、冷飯の二男坊は罹災民の可憐に同情す、眞情流露、會話を其儘筆にしてある、親馬鹿と笑はゞ笑へ私は此の調子で今後大に若返つて書きたいと思ふ。

には三町以上もある。決してそん

住めば都

京城日報社　河西青苔

住めば都とよく言はれるが、これは汽車も汽船もなかつた昔の人が仕方ない諦めの吐息と一所にいひだした、謂はば一種の輕い自己陶醉劑であつたらうと、私は思ふ。今の世に生きる私共は、氣に入らなければ入らないで、ズンズン借家から借家へも移り、都會から田舍へ若くは田舍から都會へも移り住む。其の間何のこだわりもなくスラスラと移り變る。

『電車には遠いが家賃が少し安いから、マア〳〵住めば都だ』などと諦めては居ない。大いに積極的に、電車にも近く家賃も安い家を見付けて歩く。

私は京城へ來て五年ばかりになるが、此の間幾度居を移したことであつたらう。一番最初に下宿したのが黄金町三丁目で、それから太平通、南山町、南米倉町と動いて三阪の奥で初めて家庭を作り、吉野町から若草町に出て來て更に大和町に落付き、現在は舟橋町に引込んだ。

此の中で、黄金町と若草町とは電車にも近く雜貨屋も便利だつたが而も附近の氣持が何となく暗く、世に廢れた場末の感があつた。それに比べると太平通や米倉町は同じ場末らしい感じの裡にも、一脈の都會らしい生氣が流れて居るやうに感じられた。

南山町は三越の前から入つて宮樂館の眞横だつたから、如何にも都會の中心に住んで居るやうに思はれたが、然し家賃が高かつた。

三阪の家は鮮銀舍宅の附近ではあり、大いに新しい住宅も營まれて居たが、それで居て何となく不便で、言へば周圍の文化がセメント造りの新式住宅に相應するだけの進歩を未だ示して居て呉れぬ憾みがあつた。吉野町はそれに比べると停車場にも電車にも近く、流石に多少便利だつたが、而も尙京城といふものの中心からは置いてけぼりを食つて居るやうな觀があつた。概して停車場から南と西は、電車其の他の利便が何程あつても何うも都會の中心文化からは一歩遲れるやうに感じさせられるのは敢て私のみであらうか。

大和町は一丁目に住んだが、何處となく落付きがあつて、感じが寂びて居る。南山町邊を下町としたら當方は山の手といつた感じであらうか。然しギッシリ詰つて居て空家は滅多にない。

今住んで居る舟橋町は、附近は未だ切り開かれない鮮人部落で、蠅や蚊も多し、夜などは女小供を一人歩きさせるのは物騷な位の處だが、その癖、何處となく明るい氣持がする住みよい處だ。電車には一町以上ある、花園町の公設市場には三町以上もある。決してそんなに便利ではないのだが而も何となく都會の中心へ近いやうな氣がする、四丁目の交叉點で電車へ乘り長い黄金町通を通つて鮮銀前まで大迂回をやり、偖本町に入るにしても其の途中の電車の氣持が敢て苦にならないから不思議だ。

新町下の並木町花園町邊でも大體同樣の感じらしい。

でこれを大摑みに纒めて考へて見るに、黄金町一二三町目邊の清溪川寄りや若草町附近は何うも感じが暗く重いのに、黄金町四丁目の電車の交叉點邊りから東の方へ行くと、場末ではありそんなに便利だといふのでないのに、何となく氣持が明るく、これから育つて行く街だといふやうな生氣の流れがあるらしく感じられる。

住めば都といふ言葉も舟橋町邊りへ來て初めて新しく意義を持ち、ママ〳〵相當の家賃を負擔する力でも出て來ない間は、南山町だの大和町だのと過分な望を抱かないで、せめて感じだけでも明るい今の借家を動かない事にするか、若し動いても本町行電車線から東の方で暮すことにでもするか。

矢張りマア住めば都だ。

◇久保田さん

平田久雜

近頃會つた人で、氣持の善いのは鮮銀の久保田さんだ▲理解もあり同情もあり、眞にうれしく思つた▲經營上、編輯上、いろ〳〵有益な助言をして貰つた▲前の掛井サンは、馬鹿に横柄な男で、それが爲めに鮮銀には長い間のそかなかつたが久保田さんに會つてスッカリ流飲が下つたやうだ。

京城雜筆

水の味

朝鮮銀行　岸　巖

◇

尋常小學の三年生位の頃だつたと思ひます。ある日錢湯に行くと髮結の傳吉爺さんが浸つて居て、『あゝいゝ心持だ、ほんとに極樂だ此の上このチョロ〳〵出て來る水が酒であつて呉れると、なんにも申分がないんだがなあ』と云ふやうなことを獨言して居ました。

私の故郷は東北の日本海に沿うた小さな町で、昔は千石船が港を埋める程繁昌したものださうですが其の頃は汽車が出來て、表日本の方を靑森まで縫うて行くやうになつたものですから、もうメッキリ寂れてしまつて、街道に白い埃の立つのが懶く目に付くやうになつて居ました。錢湯にもちよつと捻ると水の迸るハイカラな栓なんぞがなく、後の板から筧が出で居て湯の熱過ぎる時なぞに、板をトン〳〵叩くと、『オー』と三助君の眠い聲が聞えて、その筧からチョロ〳〵水が流れて來る仕掛でした傳吉爺さんは湯氣の中で、うつとり其の水を眺めて居るのです。

爺さんは髮結と云つても、御一新前に男の髮を專門に手掛けて居たのださうで、其の頃何で食つて居たのか――多分働き者の伴の厄介にでもなつて居たのでせう、それでも毎晩缺かさず晩酌の一本位は傾けて寂れて行く町に夢のやうに老ひ込んで行つたのです。其の時の子供心には、おかしな事を云ふ爺さんだな、位にしか思はなかつたのですが、今になつて其の言葉を味つて見ると、誠に其の町に、其の人に、其の場所に、ふさわしい情調がしみ〴〵と湧いて來て、昔懷かしく思はれるのです。

◇

さて殊勝らしく感懷めいた事を申上げましたが、私の目的は、實は水を酒に見代へた爺さんの德を讃美しようとするのではなく、寧ろ虐待せられたる水の爲に寃を雪いでやらうとするにあるのです。

またかと笑はれるかも知れませんが、小生此頃少々酒に愛想をつかしこ居るのです。永年の腐れ緣で愚圖〳〵付合つては居るものの、內々鼻について困つて居るのです風呂の栓からザー〳〵出て來るのまでが酒であつたらとても助かりません、それに反して水の味のうまさ、何と云つたらいゝでしよう『甘露』なんて云ふのは水の味を冒瀆するのです。此の頃のカルピスやパービスの廣告に使はれて居るあらゆる味の形容詞も勿論水の德を讃えるには足りません。いつかカルピスの廣告に『味の曲線美』と云ふ言葉を見ましたが、それの當れるや否やは別として、水の味はたしかに淸爽無比の直線美です。若し水が、酒やサイダーやカルピスやパービスの如く量の少いものであつたら、人々は如何に其の味を嘆美し、其の一椀の爲に千金をも拋たんと希うことでせうか愚なる人類は白湯をも亦愛視して其の淺はかな智慧から茶だのコーヒーだのといふものを製造して喜んで居るが、之等の呑み物の味が白湯に劣ることは、識者の認める所であらうと思ひます。若し茶や珈琲の味に採るべき點がありとすれば、それは實は白湯自身の持つて居る幽婉なる香味のお蔭だとさへ云へると思ひます。

よく醉ひ覺めの水の味と云ふことを云ひますが、酒を前提として初めて水の味を說くのは不賛成です醉後の水の一種の甘たるさには實つて反感を持つた時代さへあります。私は寧ろ身體の隅々まで一點の酒氣を止めぬ健康の最高潮時に於ける水の味を採ります。

さて次に、大いに水の味を發揮せしむべき設備に就ての政治論を初める積でしたが、編輯者の御迷惑を慮つて擱筆します。

◈二愛庵小記

吉田莊一

平壤の道評議員松井民治郎氏が、今の若い者も及ばぬ新らしい文章を書く事は、前號の『南大門』で見當はつくが、あの年まで子供はなく、夫人と水入らずの生活を續けて、差向いの長唄などで平壤あたりの人は、大分あてられて居るさうだ。それに一昨年頃建てた、理想的の住宅には『二愛庵』の看板をかけたので、二人相愛の意味だらうと、やつきとなつて質問した人があつたら、詩に曰く、酒を愛し閑を愛す、と答へて凉しい顏をして居つたさうな。

事務哲學

へる事は何よりも必要である。若し信じて用ひたる部下が遣り損

京城雜筆

事務哲學

鎭南浦電氣支配人　川本竹松

◇

哲學と云へば形而上の學問で區域の極狹いものであるように思はるるがなか〳〵さうでない。先づ自然哲學から宗教哲學夫れから經濟哲學や歷史哲學、變つた所では色情哲學などに至る迄數へれば隨分廣汎なものである。私は玆に先人未說の事務哲學に就て少々卑見を述べて見たい。蓋し事務哲學とは彼のデカートや、スピノザの合理說と、ベーコンやポップスの經驗說との二者を結合したる彼のジオン、ロックの哲學を根柢として創作したもので隨分八ツ敷いものゝように考へられるが私の所謂事務哲學はソンナ四角張つた六ツ個敷いものでなく、先づ今時の暑氣を拂ふ旋風器代りになる位のものに過ぎない。

◇

凡そ我々事務に從事する者は、其官吏たると、銀行員たると、會社員たると、將た又新聞記者たると商店員たるとを問はず、總て或る程度までは一樣に働き得る手腕と能力とを備へて居て、而かも其持てる手腕能力を不斷活用しようと思つてウズ〳〵して居るものなるが、不幸にも我々の上に立つて我々を日々使用する局長とか課長とか若しくは社長、頭取、店主などの所謂超事務的人物が只我々を乎馬のように驅使することのみを知つて我々……所謂洋服細民の元來具備する各自の手腕能力を如何にせば充分發揮し得らるゝやの道を知らない、換言せば矢鱈に仕事をさせる、算盤球をはぢかせる、即ち形而下の事は遺憾なくやらせるが形而上なる人間心理の如何、を無視する結果、折角各自が具備する先天的手腕能力を殊更ら胸中深く秘して……否な寧ろ押へ付けて只機械的に其日〳〵動いて居るに過ぎなくされる、之れは頗る考慮すべき大問題であつて私の所謂事務哲學なるものも之等の缺陷に向つて多少の反省を與へたいとの希望から起つた譯である。

◇

先づ一適例を擧げて見る――今の遞信局海事課長吉村氏が、嘗て地方廳から鎭南浦稅關長に轉任して來た時の部下に向つての就任挨拶は頗る振つたものである。氏曰く『僕は稅關事務に就ては全く素人で何んにも解らぬ諸君宜しく賴む而し諸君の爲した仕事に就ては僕は全責任を負ふから諸君は自由に且つ忌憚なくやつて貰らいたい』簡單で而も要を得た挨拶である。上役が初めから之れだけ部下を信賴してこそ始めて一肌脫ぐ氣にもなる又一生懸命にやりたくもなる一體我々は幼少の時から人を見れば泥棒と思へなどと敎へられて來たため我々は兎角人を信ずるよりも寧ろ人を疑うの念が强いように思うが、而し誰れしも疑はれては良い氣持はせぬが、信じられては何んとなく快感を覺ゆるものである。だから等しく人を使うとせは先づ彼等を信じて彼等に快感を與へる事は何よりも必要である。若し信じて用ひたる部下が遺り損なつたとせば夫は自分の失敗と思うより外はない。勿論人を見る明があるなしと言ふ程の問題でない何人にも失敗はあるのである、失敗は或る意味の成功の階段であるから失敗を恐れるは愚の骨頂である。故に潔く其責を負うと共に其遺り損なつた部下をどこまでも愛して決して見捨てないだけの雅量を持つべきものと思ふ。兎角我々は斯かる辛い經驗から益々人を疑うよふになる傾向があるが、夫れは自分の平凡さを表はすものと心得て、モット自己を高めるために大に修養せねばならぬ。

◇

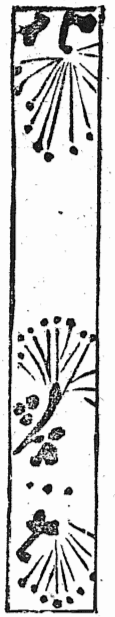
モ一ツ昔の話をしやう――羅馬の大將シーザーが政敵のため議院の入口に於て襲擊された時、彼れは極力抵抗を試みた而し其襲擊者の內に自分の親友ブルータースが匕首をかざして彼に迫り來るを視た時彼れは總ての抵抗を止めて靜かにブルータースの刄に伏した。己が信する者の反逆より生ずる責任は堯爾として之を受けよ斯かる人物にして始て大事を成し得らるゝのだ

◈火災の噂さ

平田久雄

朝鮮火災が業績不良でツブレるだらうといふものがある▲ナル程奉天方面の大火では可なりの痛手を負つたらしい▲が今期の營業から見るも朝鮮內の成績が豫期以上に良く前記の痛手を償うて餘りあるらしい▲火災は朝鮮で出來た唯一の保險會社だ、ツブレるなど甚だ緣儀がわるい▲這んな惡宣傳をするのは誰だい。

京城雜筆



趣味のない話

―俳句は入門前に破門―

有賀光豐

◇

僕に雜筆を書けと云ふのは可成無理な注文であるが、書かねばならぬ義理合もないでもない、在鮮二十年の間幾多の知己を得たが、松本君は僕の渡鮮最初よりの親友の一人だからだ、さて書くとなると何を書かうか、思も筆も澁る、元來僕には歌俳句を駄句る素養もなければ、さりとて又書畫骨董論を草して、人に見せるだけの用意もない。全く無風流無趣味で何と云ふて取り柄のない人間である。嘗て僕も責めて人並に俳句でもと思ふたこともある、同僚の天狗宗匠深尾、森、野田の諸君に就て其の道を問ひ、子規や碧梧桐等の俳書を十冊計りも讀まされたが、どうも感心しない。一體詩歌は音樂繪畫と切つても切れぬ關係にあるものと思ふ、客觀詩は其景趣を繪畫に表顯し、主觀詩は其情味を音律に上し得てこそ其宣腦をなすもので、畫にも詩けず糸にも管にも合すとの出來ない歌句が何んで詩歌たるを得るかと云ふのが、僕一流の論法で、先づ之れを以て宗匠連に當つて見たところ、そんな理屈を捏ねるのは詩歌の外道で末の見込がないと云はれ、さう〳〵入門前破門の憂りを見たのである、ところが僕も結局之を幸に十德連の御仲間入を脱することが出來た、斯くして遂に僕には風流や趣味の緣はない、畢竟書くとすれば趣味の無い話より外にはない。

◇

勾玉の蒐集は多少やつたが、特に沒頭して系統的に研究すると云ふのでなく、徒らに小兒の玩具同樣に集めたに過ぎない、强て僕の道樂と云はるれば圍碁位だらう。併し是れとて忙中閑、動中靜的に嗜好すると云ふ樣な上品格でなく寧ろ忙々動々的にやる亂暴の打方だ碁の打方の流義には色々あるが、僕には盤の四邊を這ふ樣な屈したやり方は出來ない。何んでも中部に伸展し對手を下に壓して見たいのだ、勝敗は無論第二である。二人のみ對局の場合は、圍碁其ものよりは寧ろ對手の氣分を脅して見たく、若し又觀戰者ある場合は對手よりも寧ろ觀戰者を對象とする氣になる、だから一局を一局と見或は一局を部分的に數局に見たりして變化又變化する所に勝敗以外の樂を持つのである。勿論圍碁の所謂正道には合はぬだらうが、之れが僕の流儀なので必ずしも定石に屈託もなく、石を捨てるとにも執着はない。尤も捨てた石でも隙さへあれば機に乘じて無理にも活を入るゝ癖だけは抛棄せずに保留をする。斯んな亂暴なやり方でも碁敵は又別で、憎さは憎く交は偖て愈深い、餘り石を未練がましく吝むのは見られたものではない、只偏隅の十子を捨てゝも中央の一子を吝むだけの用意は肝要と思ふ日本の外交も餘り下を這つたり石に女々しい未練はよして貰いたいさうかと云ふて北樺太の如きポント無雜作に見限られても問題だらう。大體碁なぞと云ふものは、强て上手になりたいと考へては却て駄目だ、一著手に數時間を費す樣では天下の名人と雖も其愚笑ふべしで、已來得るなれば對手に直に應ずるのが活きた戰爭なのだ、僕は只無暗矢鱈に打つと云ふのみで別に上手とは自らも思ふて居らぬが、假令對手が高段者だろうが着手の早いだけは餘り引けを取らない、手段の巧拙を究むるよりは意氣で打ちたいのだ、夫れでも休むに似たる考よりは大凡の筋と要領に合ふものである、右樣な譯で詰り僕の碁も一種の道樂かは知らぬが進んだ意義の趣味と云ふ程のものでもない樣だ、道樂と趣味の區別如何などの半疊には敢て答辯はしない、要は黑白方圓對局の間に人生觀を藏する氣分を味はんとするに過ぎない、世の同好者に望むところは圍碁をして低級の末技に墮せしめざることである、雜筆を書くは矢張り苦しい。

◈原稿の洪水

吉田莊一

本號も例に依つて原稿の大洪水、社友のもの數篇を次の號へまはした、特に榎本氏の『相撲と訴訟』おもしろいものだつたが――御勸辨を願ふ。

人も、始めは只笑つて居たが、後

ころが僕も結局之を幸に十德連の　を入るゝ癖だけは拋棄せずに保留　辨を願ふ。

京城雜筆

子供の散髮

警務局長　丸山鶴吉

私は子供が大好きだ、以前はよく子供を集めて、たわいもなく戯れ遊んだものだが、忙しい身分となつてからは、そんな緩くりした時間を與へられることが極めて稀である、然し此頃子供に對する一つの道樂が出來た。宅の子供の友達でよく遊びに來る兒達が澤山居る役所から歸つて來ると大勢で仲善く庭を飛び廻つて居る。中には頭の髮の長く延びて居るのがある。若し來客はなし、宴會への時間に暇があると、僕はその子供を呼んで散髮をしてやるのである、奇麗に苅つて顏剃までしてやると、何だかすが〳〵しい氣持になる。子供も喜ぶ樣だし自分も一種の滿足を得た樣な氣分になる。

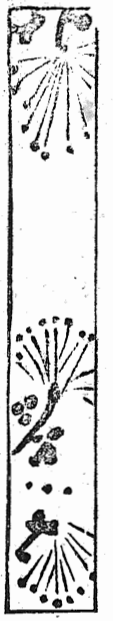
そして此の道樂が延長發展して、朝鮮の子供に及ぼうとして居る。それはこうである、私は役所の退けた後、時間の許す限り南山を散歩することを日課として居る。二十分の行程、三十分間の行程、四十分間の行程と、役所を出てから宅に歸りつくまで大抵時間によつて道筋も定まつて居る。此頃は半引けであるので、三時頃役所から退けても、晩の宴會まで可成りの時間があるので、比較的永く南山で遊べる譯である。それに夏になつて、學校は休暇になるし、暑くはあるので南山の水溜に游泳に來る子供が中々多い。これ等の子供を相手に戯談をいつたり、鬼事をしたりするのも一興である。時には圓座して二十錢許りの菓子をおごつて興ずることもある。一日の罪のない僕の道樂の一つである。子供の中には二三顏なじみになつて、おじさんといふのも出來た、然し私が誰であるか知るものはない。それで今日もいつもの通り天滿宮を拔けて、谿裏の藥水の側の水溜りの所へ出た、藥水飲みの鮮人老弱が少なくない、又大勢の子供が泳いで居る。その中に十一二歳の鮮童で頭髮が二寸も延びて如何にも暑さうに汗をかいてるのを見たから『お前頭を苅らねば駄目だ』『明日は苅つておいで涼しくなるから』といつた、その子供は恥かしそうにして何にも答へなかつたが、その隣に居た少し年長の子供が、『でもお金がないのですもの』と相の手を入れた。そこで僕の散髮本能がむら〳〵と躍動した。早速その大きい方の子供に名刺を渡して、宅へ『バリカン』を取りにやつた。それから上著をぬぎ棄てゝ、一等毛の長いのから順々に八人の子供の頭を苅つて、通の水でよく洗はして見ると、皆見かへる樣にすが〳〵した立派な子供になる。滅多に謂はないものだが、どの子供も『難有う〳〵』と衷心から喜んで呉れる。僕も謂ひ知れぬ快感を感じた次第である。周圍に見て居た多數の鮮人老弱の人も、始めは只笑つて居たが、後には他意ないことを見て、多少嬉しく思つたのか、コップに藥水を吸んで來て呉れるものや、仕事をして居る後から學子であほいで呉れるものも出來た。僕は今日そう思つた、僕の宅に遊びに來る樣な子供の頭を強いて苅る必要はないのだ。なぜこの南山の子供に早く氣附かなかつたのであらう。『お金がないのですものう』といはれたこの少年の一言で、僕はこれから『バリカン』一挺をポケットに入れて、今日はこの谿、明日はあの谿と一日に五人でも十人でも、此夏時間の許す限り、鮮童の頭を苅つて歩かう。そうしたら『私の子供の散髮』の道樂は滿腹するだらうと思ふ。

◈涼風去來記

平田久雄

會議所の大村氏、いろ〳〵の方面から原稿を要請される、ホト〳〵それに弱り切つて居る▲そこで二度は原稿を書くが、二度とは賴まれない秘策を發明した▲といふのは賴まれるが最後、大村一流の拮屈贅牙な文章を書く▲スルと流石の先方もタダの一度でげんなりとなり、又と再び依賴せぬさうだ▲キリとは罪な發明をしたものだ▲京日の西村滿藏氏は、清洒な筆を有つて居り、且つ頗る人を茶化すに長じて居る▲前號の京日自慢話など、實に抱腹絶倒的小品だ▲所で京日社内で聽くと、あゝした總てのニックネームは、みな氏の發明する所であり、命名する所であり、あの人位口のわるい人はないさうだ。

京城雜筆



連歌の話

有隣生命保險
京城支部長　山路竹城

造詣の深い人は暫時耳に蓋をして置いてもらいたい、初歩の方々に趣味を以て貰いたいから繁務の中からペンを走らすのである。

連歌の意義は普通來客のあつた時先づ挨拶があつて四方山の談に移り、御馳走も出て酒肴もあり主客共に微醉氣嫌となり、さて暢談既に酣に或は鳴物など入れて見たり亦戀愛、名所、神祇、釋教、盡きる所を知らず歡を盡し而して酒に呑まれず時の移るに從ひて威儀を正して立派に禮言を述べて歸る形ち即ち俳人の家に俳人の訪ねられた時、句の上に顯はして面白く輕風の趣味に生き且つ遊ぶのであるかるが故に初表の初發句として主人役となり、第二を脇と稱して客は挨拶する形ち、『漢字止』即ち正しき禮儀に初まる譯で第三は主人の役目で亦陪席者にても代役にても『に、て、ら、ん』止めにして相當客人に對し即ち後の付句の出來好い樣にするのである、斯くして初裏の二三句目から戀句即ち少し酒のまはりたる處四方山の談に移りあきの來た時分七句目頃には月を眺めて見たり十一句目頃には花に移つたりして居る形ちとなるのである。

名殘りの裏六句にて取亂したる姿をなほして（香いの花）（第五句目）翁の前に檢香して禮儀正しく退座の形となるのである。

故に連歌（俳諧）は小むツかしいから今少し略にすれば好いとの說もあるが俳諧を略するは軍人より五ヶ條を拔いた樣なものになるのである。

俳句でも俳諧でも掟、韻字があつて即ち是あるが故に日本固有の詩句として他國に對し權威もありほこりも出來るのである、是が韻字や、掟が拔きにして只賣名的に言葉巧みに言ひこなして見た所で骨のない障子に紙を張つた樣なもので一時的のものである。

大正の芭蕉は絕體出ない、名を賣りたければ俳句でも俳諧でもない一種特別の詩名を案出の外ないのである。

故に俳句、俳諧は俳諧として學ぶ事に心掛けて邪道に入らぬ樣せねばならぬと思ふ。

忍耐

木の葉潜る水も暫し春の海

讀史雜筆

永樂町人

○

秀吉は、登之人の兒であり、父なし兒であり、十四五歲の時は、萬歲樂の袋持として、尾參の各地を放浪した。

○

彼れに漂泊性のあるのは、此の時分の習性に依ることゝ思ふ。

○

秀吉の外征を、征服慾と觀るものがある。

が私は、是れを彼れの放浪魂性と見たいと思ふ。

○

昔は、萬歲樂の袋持として、放逸な旅をつゞけた。

今や王者として、天下のあるじとして、王者的放浪をつゞけんとするのだ。

○

畢竟秀吉は、世界的放浪兒と思ふ

○

凡そ旅せざること、家康の如きはなからう。

濱松にうまれ、駿府にそだち、そして駿府に病歿した。

彼れは東海道的偉人である。

○

秀吉の散大性と、家康の累積性とは、好箇の對照だと思ふ。

○

光秀と寺內伯とは、最も能く肖似して居る。

正直を看板とし、誠意を賣物とするところ、最もその然るを覺える

○

三成と犬養木堂と、能く似て居る

大谷吉隆三成に語つて曰く、

貴君や智あり、されど勇氣を缺く、殊に舌頭辛辣にして、無用の敵をつくること最も非なりと

宛然木堂先生でないか。

人が何人ありますか。エヘン……

納涼閑話

―俺が町内の自慢話―

ちゝぶや主人　堀内滿輔

さあ、けふは俺が町内の自慢話を聞かせうか、流石は東京なら銀座通りといふ本町二丁目の事だ、どつちを向いても自慢話なら掃く程ある。

さて咳一咳して、先づ語り出すのは第一に京城電氣會社さ、だが資本金が何百萬圓で、獨專事業で何割配當で、積立金が幾らで、事業の範圍が斯うで、兎角評判が何うだのと、そんな事は今更暑苦しいから拔きにする。

町内の世話燒きがお祭りや何かの催事をするため、會社へ寄附を賴みに行つた時、あの凛とした顏の持主武者事務さん、それにいつもにこ〳〵して居る山元庶務課長さんの、よく要領を得て出し振りのよいのは本當に氣持がよいね、京城神社の大祭、曰く御成婚記念事業街路電、マーケットの納涼場の設備、何、何、といつも快く出して呉れる。

どうた、羨しいだらう、今時外の町内にこんなすば〳〵出して呉れる處はあるめい。

次ぎが、すぐ前の中村再造さん朝鮮第一の○持ちだ。

何ケチな事も一等だらうつて、まあ、うるさい、そんな餘計な事は云はんでもよい。

その次ぎが民間に於ける朝鮮財界の一人者、釘本藤次郎さんも俺が町だ。

何にそれには少し意見があるつてぢやア君は又釘本さんの何かアラを擧げる積りか、そりや又の時聞くとにする、けふは俺の自慢話をおとなしく聞いて呉れ處でどうだい、釘本さんが辭職した商議會頭と京取社長の後任問題は三ヶ月にも亘つて未だに決まらんぢやないか、お役人樣上りの多い銀行や會社は別として、京城純民間側とも云ふべき方面に如何にも人物難を痛感すると同時に、彼の一見敦厚素朴の釘本さんが、どこかに餘程偉い處があつたと云はなければならないね。

どうだ君感心したらう。

お次ぎが京城財界の大久保彦左衞門を以て自他共に許す處の山口太兵衞翁も又我が二丁目が作つた成功者であるんである。

今でこそ、南山々麓で宏壯の邸に松籟を聞きつゝ風月を侶として居るが、若い時分は前垂れ掛けで三文商ひの雜貨屋もやつたし、へイ輝かね、晒六尺十二錢、毎度ありがたうの呉服屋さんもやつたのだからねー。

中村、山口翁、釘本さん、中で多少の批評はあるにしても、何れも何處かに非凡の才能を有して居ると云はなければなるまい。

而してだ、京城繁榮史を書くとしたらば、共に逸してはならない人ばかりぢやないか。

我が二丁目を措いて、他にこんな人が何人ありますか。ヱヘン……併もだ、その壯年時代に於ける、拮据奮鬪、苦心慘憺、共に立志傳中の人で、吾々若い者は大いに學ぶべき點が多いと思ふね。

や、その通り、肩を痛めざれば良賈たる能はずかね、口許りぢやいかん、君なんか、ちつと瓜の塢でも賈つて煎じて飲んではどうか。

さて次ぎに吹くのが、朝鮮第一の料亭花月も正に二丁目の所在だ、何百疊の座敷があつて、何百人の宴會が一遍に出來るなんて事は、自慢の種にしないさ。

若し京城に料理屋大學なるものが出來るとしたら、先づ花月を移管すべきであると思ふ。

なぜつて君、今京城の料理屋でこの花月……の學窓ぢやない、丸窓だか、四疊半だか知らないが……で螢雪、いや閨節の苦を積んだものは隋分澤山あるよ。

何處だつて、そら千代本、千歳喜代中、菊本などの女將は何れも曾て吾花月に仲居なり、又左褄なりをとつて居たのだと云ふとだ。遂この間廢業した清華亭の女將も矢張さうだげな。

又松葉亭の主人公も元花月の板場だつたそうな。

その他卒業生でなくとも所謂聽講生といつた處を掻き集めたら大變の數になるだらう。

先づ斯う並べ立てると丸で花月は料理屋の養成所見たようのもので斯界に貢獻したる處多大なりと謂ふべしで我輩の自慢話の種に加へる又所以なきにあらず焉かね。

次ぎが朝鮮の宮殿をそのまゝ本町の眞中に移して來たやうな彼の朝鮮館も諸の一とする。

それから京城三霸の一、增田三穰さんの美髯も他の町では見られないだらう……まア今日はこの位にして置かう。

京城昔ばなし

山口太兵衛

◇

現在京城に於ける文物制度の發展施設の完備を讃美するに方り京城の創始時代即ち今より四十年の昔に遡り當時の態を追憶するとき、何一つ隔世の感なきものはないのであるが、殊に其感を一層深からしむるものは。

交通機關の發達、蜘蛛の巣の如く張られたる通信網、警備機關の充實等である、今日内地の大都市に比較しても決して遜色のないと云ふ大京城郵便局の其の前身としての創始は明治十八年始めて仁川に郵便局を設置せられたのであるが當時の局長は吉田文藏君で同君が即ち仁川及京城に於ける郵便局長としての第一世である。

當時の京城にはまだ郵便局の設置を見なかつたので二十一年の春始めて仁川局の郵便ポスト一基を泥峴街に建て次で領事館内の門長屋の隅突一室に仁川郵便局の出張所を設けて深尾八次郎と云ふ人が仁川局よりの出張員として領事館内の一室で郵便事務を取扱つて居たのである。此の仁川郵便局出張所が出來るまでの在留民の通信は如何にして取扱つて居たかと云ふに、それは仁川に原金と云ふ旅館兼問屋があつてそれから毎日必ず双方より一回は駄馬を差立てると云ふ事になつて居て、それが京城仁川間往復の都度郵便物を取り纒めて仁川に託送したものであつた。

此の時の賃金は壹通五錢を出して其の駄馬に依頼し仁川局へ投函して貰ふ定めになつて居たのである之れが前に述べたる如く仁川局から出張所を置かれる前の唯一の通信機關として在留民に重寶がられて居つたもので、其後出張所が愈々京城郵便局となるに及んで局長として最初の人は武田尚君であつた、同君は現在有栖川宮殿下の御用係か何かを勤めて居られる筈である。

◇

警察の出來たのも矢張り十八年で最初は領事館内の朝鮮家の一部をそれに充てた、そして署長は澤田直澄と云ふ人署員としては、領事館付巡査が九名、公使館付に警部中村四郎兵衛君以下護衛巡査四名が居つた、之が其の時代の京城に於ける警察の總員であつたのである。

公使館の方では高平小五郎氏が最初の代理公使で近藤眞鋤氏、大石正己氏次いで川北、梶山氏から大鳥圭介公使の代に至り日清の役となつたのである。

領事館の方では結城顯彦久水三郎の兩氏領事代理となり次で穐口直右衛門氏領事として來往、又元新聞記者であつたと云ふ杉村濬氏、

【三八】

内田定槌氏相次いで就任、この時恰度日清戰爭となつたのである。

◇

二十一年始めて日本式の建築として目立つたのは、浦川龜次郎と云ふ人が初めて稱領事館通りに總二階建の料亭を造つたのであるが此の二階が二十八疊敷けると云ふで之れが當時京城に於ける日本建築物としての一大偉觀として評判になつたものである。——此頃無論藝者などいふものはなく、それは三十年始めて出來たと記憶する。

其後此の料亭は山田松太郎と云ふ人が引受けて經營する樣になつたが、其頃から漸く京城で新年宴會等の催しがあるやうになつて會費は一人前四拾錢で、可なり高いと云はれた酒が鱈腹飲まれたものである、然し看と云つては今頃のやうに鯛とか何とか云ふ贅澤なものはなく唯朝鮮人市場で捌かれる平目とか鰡とか鮑の如きもので間に合したのであるが、それが段々と宴會費も高くなつて五拾錢位になりそれから日清戰爭頃公式の相場が貳圓位になつて來た。

此外に料亭では女傑として名のあつた、林マツと云ふのが七福樓と云つて開業し次いで只今の原金の所に松春亭と云ふのを松井シマと云ふ女が始める、亦た以前井門と呼んで居た井門榮太郎君の松翠樓が出來、花月などの出來たのそれから後のことであつた。

花月の先代阿比留君夫妻は今の賛化堂の所で蕎麥屋を開業して居たのであるが、非常なる努力家でよく奮闘したものである其の結果が即ち今日花月の大を成したる原因であつた。

◇

普通商店で最初に綿日本式の建築

京城雜筆

をしたのが今の本町二丁目にある北村帽子店の所で彼處は二軒に仕切られてあるやうだが中山淺吉と云ふ人が二十年に間口五間に奥行二間それに六疊の間、臺所、廊下付と云ふのが其頃の京城では一番大きなものであつた。

◇

其時代金融機關として盛んに活躍した質屋――朝鮮で云ふ典當舗は明治十九年頃、正式に看板は出してなかつたが最初に始めたのが、百田館吉、小野瀧三郎、中村再造君等で、後に正式に看板を掲げたのは旗島勝與、岡崎雋吉、森勝次中村再造君等であつた、尤も是れは誰れが一番先きであるか一二の順序は記憶に確かでないけれ共要するに右の人達で。

當時の質の利息と云ふものは今から考へて見れば誠に想像もつかぬもので、重に朝鮮の慣習に則つて行つたものであるが、朝鮮では一箇月を幾つにも仕切つて、例へば五の日、十の日と云つたやうな仕切計算を執つて居た、今でも行はれて居る所もあるが。

其頃は五日を以て一仕切となし十日目は二仕切と云ふ風にハンパスツーバスと呼んで居つた、此のハンパス即ち五日間の利息が壹割と云ふので壹ヶ月に換算すると實に六割と云ふ利息を取つて居たものである。――一夜でも一仕切とせられて居た。

其頃第二期警察署長として赴任して來たのが鹿兒島の人で敏腕の聞え高かつた有川貞壽君で同君の代になつてから、此の仕切を五日から十日にし、壹ヶ月にしたのであつたが、先づ十日勘定の時に、金高とそれに對する利子とを制定して、三歩乃至五歩の利子と云ふ定めになつたが。

それでも月に換算すると一割五歩と云ふ利息を得たものである此の金高、利子制度が作られてからも同業者の中では可なり拔目のない方法が講じられたのであるそれは當時の取引は主として朝鮮の錢で何貫文と通稱したのだが。

利子の制限に二十貫（約十圓）以上は五歩の利子、二十貫以下は一割と云ふ月定めの利子に對してである。

斯うなると貸す方では決して一口に二十貫以上と云ふ貸出しをしない、タトへば二十五貫のものがあるとすれば一口は十五貫、一口は十貫と云つた風に小口に割つて、やつぱり一割の利子は徴收したものであつた。斯樣な駈引は昔ばかりでなく現在でも行はれて居るかも判らないのであるが。

是れでは大口の金を借りる人には、勿なからざる打擊であるので何んとかして大口の金を一口に借る事の出來る機關の必要が叫ばれる樣になつて、別に出來たのが質屋でない金貸業と云ふのである。

之を利用すれば大口に金の借出しも出來るし、亦利子の如きも月に何歩と云ふので前の質屋から借るのよりか大層都合が好いやうであるが、扨て巨額の金の貸借になつて來ると、所定の金利以外に借る方では手數料として何歩かを取られると云ふ有樣である。

是れは少々昔ばなしから脱線したやうであるが、小さくても大きくても借りる方の側になると立つ瀬がないと云ふ事になるのは誠に氣の毒な事どもであると思ふ。

編輯後記

一記者

○子供の病氣やら入院やらで、十分の編輯の出來なかつたことを殘念に思ふ。

○が寄稿は愈々多く、中には容易に觀られない名篇もある。

○編輯者として、自ら慰むる次第である。

○地方や滿洲からもぼつ〳〵原稿が來るやうになつた。

○讀者に喜んで貰ひたいと思ふ。

○丸山局長の『子供の散髮』は、しのびやかに書かれたものである然るに本稿のマダ世に出でざる以前、早くも逸事として、新聞に有名となつた、が局長の心境は、本篇で能くわかるであらう。

○有賀頭取の『趣味のない話』、これは頭取自らペンを揮はれたもので、何人にも珍らしく讀まれると思ふ。

○非常に暑い時である、寄稿諸家が特に本誌のために、時と勞苦とをわかたれたことを感謝する、ほんとうに喜んでゐます。

社告

一、電話開通

七月一日から雜筆社電話『光化門三〇六』が開通いたしました

二、購讀料金

讀者の側からどうか御拂込みくださるやうに、特に面倒ですから一箇年分以上を。

三、社員消息

下村君（鐵男）は六月三十日限り退社いたしました。

金剛山産松の實應用菓子

金剛飴
金剛山
金剛饅頭
金剛煎餅
金剛羊羹
金剛おこし
金剛しるこ
金剛うに
金剛このわた
金剛でんぶ

京都二城本丁目
亀屋本店
電話本局二十七番
四七五番

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります

德用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七九八

發賣元 **富田商會**

長電話本局三三〇九番
振替京城四五六八番

夏向背廣服
同オーバ
レインコート
新地質續々着荷

仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品頗る豐富

▲御注文に應じ特製仕候

京城鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

京城本町二丁目
田中時計店
田中三郎
電話本局二五七番

歯科専門
和家歯科醫院
京城長谷川町二一
（明治町停留場西入）

キリンビール
ダイヤレモン

教育普成株式會社

京城永樂町二丁目

（電話本局一九四八番）（振替京城四六二七番）

細工の
時用は
本町の
德力へ
預ります
電話本局
三九二九

德力
金銀白金

辯護士
高橋章之助
京城仁寺洞

辯護士
榎本隆
京城明治町

大正十三年八月八日印刷
大正十三年八月十日發行
一部定價金二十五錢

京城府和泉町一六四
發行兼編輯人 松本武正
印刷人 下村鐵男
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

金剛山雜詩

◇

心をば松ふく風に殘しおき月におり行く金剛の山（大町桂月）

◇

閑古鳥みねにたかなき木蓮の香谿にみつ蓬萊の山（菊池幽芳）

◇

天地の密敎とこそいふべけれ金剛山の秋の夕ばえ（大倉鶴彦）

◇

萬二千いかなる神のたくみもて削り成しけんあはれこの山（鮎貝房之進）

◇

萬壑秋酣紅映黄。削成天斧是金剛。不將雄筆闡奇勝。故放山靈獨壇場（德富蘇峰）

◇

群山相揖迎吾立。玉女嫣然爲我容。好挾飛星游碧落。雲高一萬二千峰（橋本關雪）

◇

滿溪翠翠雜松楓。純石成山各異容。天下奇觀推此地。金剛一萬二千峰（高島北海）

◇

千仞絶崖磨者誰。金剛力士聖天知。生憎五百仙人笑。低首抵書一小辭（志賀重昂）

京城本町　進辰馬氏（所藏）

教育普成株式會社

京城永樂町二丁目

（電話本局一九四八番）（振替京城四六二七番）

細工の
時用は
本時の
德力へ
預ります
電話本局
三九二二九

德力

金銀白金

辯護士
高橋章之助
京城仁寺洞

辯護士
榎本隆
京城明治町

大正十三年八月八日印刷
大正十三年八月十日發行
一部定價金二十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼編輯人 松本武正
印刷人 下村鐵男
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

金剛山雜詩

◇

心をば松ふく風に殘しおきて月におり行く金剛の山（大町桂月）

◇

閑古鳥みねにたかなき木蓮の香谿にみつ蓬來の山（菊池幽芳）

◇

天地の密敎とこそいふべけれ金剛山の秋の夕ばえ（大倉鶴彦）

◇

萬二千いかなる神のたくみもて削り成しけんあはれこの山（鮎貝房之進）

◇

萬壑秋酣紅映黃。削成天斧是金剛。不將雄筆闡奇勝。故放山靈獨壇場（德富蘇峰）

◇

群山相揖迎吾立。玉女嫣然爲我容。好挾飛星游碧落。雲高一萬二千峰（橋本關雪）

◇

滿溪紫翠雜松楓。純石成山各異容。天下奇觀推此地。金剛一萬二千峰（高島北海）

◇

千仞絕崖曆者誰。金剛力士聖天知。生憎五百仙人笑。低首抵書一小辭（志賀重昂）

京城本町　進辰馬氏（所藏）

◎銘仙と
毛糸◎

京城本町
ちゝ姫や
堀内滿輔
電話本局
五五八番
〇〇九番
五〇六番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

京城雜筆（第六十六號）
大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十三年八月十日發行　毎月一回十日發行